筑波大学第三学群国際総合学類

卒業論文

「つくばスタイル」とは
―拡張するその意味とつくば市民―

2010年1月

氏　　名：宇留野晴香

学籍番号：200611104

指導教員：関根久雄教授

目　次

第1章　序論 1
1. はじめに 1
2. 問題意識・問題設定 3
3. 研究方法 4
第2章　つくば市の発展過程と「つくばスタイル」 5
1. つくば市概要 5
2. つくば市の歩み 5
(1)筑波研究学園都市 5
(2)つくばエクスプレスによる影響 8
(3)住民の混在と「つくばらしい」魅力の醸成 8
3. 沿線開発に対する眼差し 11
(1)つくば市 11
(2)一般住民 11
(3)茨城県、独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構） 12
(4) まちづくり市民専門家 13
4.「つくばスタイル」の誕生 14
第3章　「つくばスタイル」の検証 17
1. 拡がる「つくばスタイル」 17
(1)「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」 17
(2)つくばスタイルフェスタ 2005 19
(3)Mook 誌『つくばスタイル』 21
(4)「つくばスタイル」の根底にあるもの 29
(5) 一般住民からみた「つくばスタイル」 31
2. システムとしての「つくばスタイル」 35
(1)つくばスタイル縁日 2009 35
(2)内部発展型のしくみ 39
(3)相互作用による活性化 40
第4章　結論 42
注 45
参考文献 48
Summary 51
謝辞 52

図目次

図 1　項目別「つくばスタイル」認識度……34

表目次

表 1　転居前の居住地……32
表 2　転居前の「つくばスタイル」認知度……32
表 3　転居後の「つくばスタイル」認知度……33

第1章　序論

1. はじめに

地方分権、地域活性化[1]が国の政策の中でも叫ばれ始めて、すでに30年ほどが過ぎようとしている。1960年代から70年代にかけての高度経済成長の中で、東京への一極集中、地域格差の拡大が顕著となり、地方分権を求める動きが強くなった。これに対して1980年代から90年代はじめに行われたのが、ハード面の開発を重視した地域振興政策であった。この政策は地方における交通基盤の整備などに一定の成果はあったものの、バブルの崩壊とともに財政が悪化し、行き詰まりをみせた。

そんな中、国土庁が1998年に打ち出したのが、『21世紀の国土のグランドデザイン』[2]である。ここでは2010年から2015年を目標年次に定め、これまでの国主体の一極一軸型から地域主体の他軸型へ、国土の構造転換を目指すことが明記されている。さらにこの構造転換には、各地域の個性的で主体的な地域づくりへの取組みが必要であることが繰り返し述べられている。

では、なぜ国主導ではなく、地域主体の個性的な地域づくりが必要なのであろうか。まず挙げられるのが、国民意識の転換である。これについて、前出の『21世紀の国土のグランドデザイン』では、以下のように述べられている。

> 我が国は、20 世紀型の経済発展を通じて経済の量的拡大を遂げてきた一方で、生活、環境、文化、産業の面で様々な問題を抱えている。そのような状況を背景として生じた、価値観、生活様式の多様化は、わが国の経済社会が個性の尊重、多様性の重視という観点に立って、効率性の向上と併せて人の活動と自然との調和を含めた質的向上を目指すべき段階に入ったことを示している[国土庁 1998:1]。

この多様化に関連して、平間は、「住民が自らの価値観に応じた多様な生き方を選択できるような、個性的で活力ある地域社会を形成するためにも、地域の問題は地域が主体的に取り組むという地域経営の原則が、ますます重要になってきている」[平間1999:46]と述べる。つまり、多様化した価値観を持つ人々のニーズに応えるには、より住民生活に密着した地域が、柔軟な取り組みを行う必要があるということである。

国主導の画一的な政策では、もはや対応しきれない。

つぎに、グローバル化をはじめとする時代の潮流が挙げられる。経済領域におけるグローバル化の進行により、財やサービスが国を越えて普及しやすくなった。このことは国を越えた地域間競争の激化を招き、さらに各地方の個性を奪い、画一化を進めると懸念されている。しかしその一方で、高度情報化により、地球規模での時間と距離の制約が克服され、住む場所、働く場所、学ぶ場所の選択の幅が拡がるとも考えられる。地域の情報格差は解消に向かい、どこにいても世界の情報を手に入れ、世界に情報を発信できる。このようなメリットを活かし、地域間競争に負けないために、人々に選ばれる個性的な地域づくりが求められているのである[国土省 1998:3,4; 恩田 2002:17,18]。

ここまで述べてきたように、個性的で主体的な地域づくりが求められる時代になっていることは明らかであるが、そもそも地域づくりとは何なのであろうか。その定義はさまざまあるが、例えば恩田は、「地域づくりとは、地域固有の資源を活かして、地域住民の生活力を向上させることである」[恩田 2002:1]と述べている。また平間は、「自らが居住する地域を、より住みやすく、より豊かにするために、住民が主役となり、自ら考え、自ら行う諸活動の総称」[平間 1999:23]を地域づくりと呼ぶ。両者の議論の中から導き出される地域づくりとは、地域資源を活かし、住民主体で、住民生活を向上させることである。ここでいう住民生活の向上とは、産業が興り、雇用が増え、地域の所得が増えるといった経済的な側面もある。一方で、住民が生き甲斐を持ち、地域の誇りを持って暮らすといった精神的な面での向上でもある[平間 1999:24]。

では、地域づくりはどのようなプロセスを踏んで行われるのであろうか。まず必要なのが、地域を取り巻く外部環境の分析である。社会情勢を把握した上で、現在何が社会に求められているのか、何がうけるのかを考える。そこで浮かんできたニーズをもとに、内的環境に目を向け、地域内で利用可能な資源を探す。その地域固有のヒト、モノ、組織、情報について分析し、何が最も地域づくりに活用できるのかを選定する。ここで選定される資源は、他の地域に対して魅力が高いと思われる「強み」を持つことが重要である。活用する資源が決まれば、それをどのように活かしていくのかの戦略を立て、実行していく。こういったプロセスの中で重要なのが、住民の参加である。地域の見直しを通して、住民が地域への誇りや愛着を持つことが地域づくりには欠かせない。また、地域の魅力はよく外部者が発見するといわれるが、地元住民が支持で

きるものでなければ、住民の生活向上につながらず、地域づくりとはいえないのである[恩田 2002:23-51]。地域づくりにおける住民の参加は、住民の多様なニーズを捉えるのみならず、住民が地域に愛着を持つという精神面の向上、さらにそれが地域の魅力になるといった正の連鎖が起こるという意味でも非常に重要な要素であるといえる。

2. 問題意識・問題設定

地域づくりに関して、先に述べたような背景を踏まえると、本稿で取り上げる「つくばスタイル」は非常に興味深い要素を多く持っているといえる。「つくばスタイル」とは、つくば市を中心として取組まれている地域づくりにおいて重要なキーワードになっている概念である。

現在のつくば市にあたる地域は、1963 年に筑波研究学園都市の建設が閣議決定されてから、研究所、大学が建ち並ぶ研究学園都市として発展を遂げてきた。それから 40 年あまり経った現在、つくば市は 2005 年のつくばエクスプレスの開通をきっかけに、さらなる転換の時期を迎えている。新線開通の決定にともない沿線の区画整備を行った茨城県、独立行政法人都市再生機構（以下 UR 都市機構）は、沿線地域の活性化を目指し大規模な宅地開発や商業施設の誘致を行い、沿線地域を中心に新たな街が作り出されつつある。また、つくば市も定住人口の増加を見込み『つくば市都市計画マスタープラン 2005』を策定し、地域政策に取組んでいる。このような動きの中でよく耳にするのが「つくばスタイル」という言葉である。この「つくばスタイル」には現在の地域づくりで重要とされているさまざまな要素が含まれている。

まず、この「つくばスタイル」のもととなるアイデアが、自治体主導で作られたものではなく、つくば市民の声から生まれたものであるということが挙げられる。住民参加型の地域づくりが注目される中で、市民の声から生まれたアイデアを自治体が取り上げ、意見交換をしながら、地域の魅力発見をしている点において、注目できる事例といえる。つぎに、この「つくばスタイル」が含む地域の魅力、つまり地域資源の内容が実に多様であることが挙げられる。これまで各地域で取組まれてきた地域づくりでは、その地域の特徴をうまく表現できるものを絞り込んで発信する事例が数多くみられた。しかし、「つくばスタイル」はつくばの魅力をすべてひっくるめて発信していこうという取組みなのである。このような特徴を持つ「つくばスタイル」を分析することで、地域づくりにおける新たな展開がみえるのではないかと考え、研究対象と

するに至った。

本稿では、まず「つくばスタイル」という言葉が生まれた経緯を開発事業者、市民などのアクターの発言、執筆物に基づいて概観する。つぎに、それぞれのアクターにとっての「つくばスタイル」の意味を、具現化されたイベント、雑誌媒体を多角的に分析することで整理する。その上で、この言葉が現在のつくば市のまちづくりにおいてどのような役割を果たし得るのかを考察することを目的とする。

3. 研究方法

本研究は文献やインターネットから得られる情報、また筆者が実施するインタビュー及びアンケート調査に基づいて行う。第2章では、現在に至るまでのつくば市の状況の変化と「つくばスタイル」という言葉が生まれるまでの経緯を概観する。第3章では、さまざまな文脈で使われる「つくばスタイル」について事例を通して分析し、その使われ方や人々の捉え方を主に事業者、活動家レベルで考察する。また、事業者によって発信される「つくばスタイル」の受け手としての住民レベルにおける「つくばスタイル」の捉え方についても、アンケート調査の分析を中心に明らかにする。これらを踏まえて、最後に第4章で、まちづくりにおいて「つくばスタイル」が果たし得る役割と課題について考察し結論とする。

なお、「つくばスタイル」というときの「つくば」は、多くは茨城県内TX沿線の地域、つまり、つくば市、つくばみらい市、守谷市を指している。しかし、本稿ではつくば市内にのみ主眼をおいて論を進める。また、本稿における「市民」とは地域づくりに積極的に関わり意思のあるつくば住民を指し、一般住民とは区別して使用する。単に「住民」と使用する場合は一般住民を指す。

「まちづくり」という言葉の表記については、「街づくり」、「まち作り」など複数存在するが、本稿においては、引用部分を除き一貫して「まちづくり」と表記する。「地域づくり」、「地域の魅力を活かす」といった場合の「活かす」についても同様である。

第2章　つくば市の発展過程と「つくばスタイル」

1. つくば市概要

つくば市は茨城県南西部に位置し、総面積 284 km^2、南北距離 30.4 km、東西距離 14.9 kmの南北に長い土地を有する。そのほとんどが関東ローム層に覆われた平坦な土地である。市北部に位置する筑波山はその姿の美しさから、古くは『万葉集』にも詠まれ、深田久弥の『日本百名山』にも挙げられた。現在では登山者からの人気が高く、年間約 250 万人以上が訪れる観光地として有名であるだけでなく、ランドマークとして多くの人々に愛されている[つくば市 2008]。

現在つくば市の人口は約 21 万人。地方都市の人口減少が叫ばれる昨今においても、人口は上向きに推移しており、増加人数においても県内一である[国勢調査]。また人口構成においても、他の都市にはみられない特徴がみられる。例えば、つくば市には 1 万 2000 人以上の研究者がおり、その内 5500 人以上が博士号取得者である。また市内には 130 カ国にも及ぶ国々からやってきた 7176 人もの外国人が居住する[今村 2005:26,47。このような特徴は、つくば市がこれまで歩んできた歴史に大きく関係しており、この地域の歴史、つくば市の成り立ちを踏まえることなしに、現在のつくば市を語ることはできない。

2. つくば市の歩み

(1)筑波研究学園都市

現在のつくば市にあたる地域は、市町村合併によりつくば市になる以前は筑波町、大穂町、豊里町、谷田部町、桜村、茎崎町と呼ばれ、農業中心生活が営まれていた。このような状況に大きな変化をもたらしたのが、筑波研究学園都市の建設であった。

1)都市創設期

筑波研究学園都市の建設計画のきっかけは、1961 年に首都機能の一部を地方都市に移転するという内容の「官庁移転について」の閣議決定がされたことにあった。そこには、戦後間もないころから浮上していた東京の人口過密化などの大都市問題への対策という意図があった。当時は中央官庁が率先して移転するという話であったが、ほぼ時を同じくして、科学技術振興のため、国立研究機関の大都市からの移転、新都市

造り構想が挙がったこともあり、研究学園都市建設へと変化していった。1963 年には 5 箇所の候補地の中から筑波地区での建設が決定され、各研究・教育機関の移転の歩みが始まった[石川 1972:22-24; 鈴木 1985:66]。

建設決定当初、計画地が多くの農地を含んでいたことから地元住民の反対運動が起こり、土地買収は遅れた。また、一向に現実味を帯びてこない都市計画に各機関が移転を躊躇するなど、決して順調な滑り出しとはいえない状況であった。そんな中、政府は計画の修正、具体化を進め、1968 年には防災科学技術センターの大型耐震実験施設が研究学園都市初の着工を迎えた。その後 1970 年には、「筑波研究学園都市建設法」が制定され、各施設、住宅の建設が進み、居住環境の整備も進められた[今村 2005:33-35]。1972 年、現在の竹園地区に建てられた初の公務員宿舎に研究所職員の家族 19 世帯が入居したのをはじめとして、吾妻、並木、春日、松代の各地区に建設された官舎への入居が進んだ。そして、1980 年の気象研究所の移転により、予定されていた 36 機関すべての移転が完了した[鈴木 1985:66]。

2)都市整備期

ここまで述べてきた各機関の移転期を研究学園都市の建設期とするならば、1980 年以降を都市整備期ということができる。整備期の初期段階で都市整備を推し進める原動力となったのが、1985 年に予定されていた国際科学技術博覧会（以下科学万博）の開催であった。すでに 1978 年には開催に向けてプロジェクトが動き出しており、都心部の充実、周辺地区整備の推進、地区内外の交通網強化などが目指された。実際、1983 年のつくばセンタービルのオープンをはじめとして、つくばエキスポセンター、筑波メディカルセンターなどが次々と開業を迎えた[常陽新聞社 1997:95,96]。

こうして開催された科学万博には、27 の民間パビリオンと海外 47 カ国、37 国際機関が参加し、6 ヶ月の会期中、国内外から 2033 万人もの入場者が訪れた[常陽新聞社 1997:94]。国際的な注目を受けたのをきっかけとして、民間企業の筑波地区への進出希望が強くなり、いくつかの民間研究団地が作られた。科学万博会場跡地に作られた工業団地や、筑波テクノパーク豊里、大穂などがこれにあたる[河本 1990:75]。

1987 年には、大穂町、豊里町、谷田部町、桜村の合併によりつくば市が誕生する。翌年には筑波町もこれに加わり、ようやく行政が一体となって研究学園都市に関する政策を打ち出していく体制が整った。

3)都市発展期

つくば市が新たな段階を迎えるきっかけとなったのが、常磐新線構想の浮上である。のちに、つくばエクスプレスと呼ばれることになる常磐新線の計画が、国の政策の中で初めて盛り込まれたのは1985年のことであった。この計画の背景には、国鉄常磐線の混雑解消と、鉄道過疎地域の地域開発という2つの目的があった。前者については、当時、国鉄常磐線の沿線に開発されたベッドタウンから首都圏への通勤者が急増し、その混雑は限界に達していた。松戸、取手周辺では朝のラッシュ時の乗車率が200%を越え、関係する国鉄、茨城県、千葉県では線増が叫ばれていた。この常磐新線構想に筑波研究学園都市が関わることになったのは、茨城県による地域開発の思惑があったからである。それは、発展しつつある研究学園都市と首都圏との交通利便性を高めると同時に、その中間地点に存在する鉄道過疎地域の開発を目指したものであった[日本経済新聞社 2005:11-14]。

1989年には「大都市地域における宅地開発および鉄道整備の一体的推進に関する特別措置法」（以下宅鉄法）が成立した。鉄道の開業にあわせて、駅周辺地域を整備し、乱開発を抑えながら大量の住宅を供給するというこの立法は、高度経済成長期の都市圏における住宅不足を背景としたものであった。その後、バブル崩壊による地価の下落、住宅の都心回帰などによって、環境の大きな変化はあったが、便利でゆったりした住まい空間を求める人々のニーズは存在し続けていた。常磐新線構想はそのようなニーズを満たす快適な住空間を実現するためのモデルケースとなったのである[日本経済新聞社 2005:2,3]。宅鉄法は「“常磐新線推進法”ともいうべき」[常陽新聞社 1997:9]といわれるように、実質、常磐新線を建設するために作られた法律であった。その基本計画の中では、秋葉原からつくばまでの路線総延長距離は58.3km、所要時間は快速で45分といった新線に関する詳細が記されている。また、沿線開発については、駅設置予定地周辺を重点地域とし、鉄道建設に併せて相当量の宅地開発を行うことが明記されている [常磐新線整備推進課 1998]。

1991年には、東京都、埼玉県、千葉県、茨城県を中心とする周辺自治体、民間企業の出資により、第三セクターである「首都圏新都市鉄道株式会社」が設立された。それ以降、2000年の開業を目指し、鉄道建設計画及び、それにあわせた都市開発計画が策定され、用地買収も進められた。1994年には秋葉原において起工式が行われ、開業

に向け順調に進んでいるかのように見えた。しかし、都市計画決定は沿線においてばらつきが見られ、1996 年には開業目標を 5 年遅れの 2005 年とすることが明らかにされた。2001 年には、それまで常磐新線と呼ばれていたものを正式に「つくばエクスプレス（以下 TX)」と名付け、2005 年 8 月 24 日、待望の開業を迎えた[常陽新聞社 1996:9-13]。

(2)つくばエクスプレスによる影響

つくばから、守谷、流山、八潮を通り、秋葉原までを最短 45 分で結ぶ、TX の開業はつくば市に大きな影響を及ぼすと予想された。関係する自治体や地権者などの間では、開業前から期待と不安を込めてさまざまな議論がなされた。

それまで、つくば市から都内までの交通といえば、JR 常磐線と高速バスが主なものであった。しかし、JR 常磐線の最寄駅である荒川沖駅までは、中心地であるつくばセンターから 30 分ほど路線バスに乗らなければならない。一方高速バスは、つくば、東京間を約 65 分で結び、1 日 86 往復という全国でも有数の路線であったが、交通渋滞などにより大幅に到着時刻が遅れるなどのリスクがあった。このようなアクセスの不便さを解消するのが TX であった[今村 2005:9;日本経済新聞社 2005:36]。

TX の開業により、都心から、または都心を通って、つくば市へやってくる人が増加することが大いに期待できる。このような例として挙げられるのが、観光客である[日本経済新聞社 2005:159]。これを見据えてつくば市は TX の各駅を中心とした交通網の拡充に取り組んでいる[つくば市 2005]。しかし、やって来る人が増えるということは、見方を変えれば、出て行く人、例えば買い物客なども増えるということになる。それまでつくば市内で消費活動をしていた顧客が東京に吸い取られる可能性があった。顧客をつくばにつなぎとめ、さらに他地域から吸い寄せるような企業の努力が必要であった[日本経済新聞社 2005:59-60]。

(3)住民の混在と「つくばらしい」魅力の醸成

前節で述べたような歴史を歩んできたつくば市では、住民の混在により独自の文化、風潮をつくり出してきた。ここでは住民レベルでの人々の交流の歴史を概観することで「つくばらしい」と表現される魅力の源流を探っていく。

筑波研究学園都市が建設される以前のこの地域は、農業中心の社会であったため、

自給自足的な生活が営まれ、都市的な分業体制は未発達であったと考えられる。そこに1970年代の筑波研究学園都市建設をきっかけに、大量のサラリーマン（研究者）が家族、住宅、職場、すべてを持ち込む形でやってきた(3)。つくばではこの時期を境に、以前からこの地域に住む人々を旧住民、学園都市施設に通勤・通学するために移住してきた人々を新住民と呼んでいる[小林・斎尾 2009:342]。当時の新住民たちは、都市基盤が全くといっていいほど整っていないつくばにやってくることに、非常に不安を抱いていた。それは住居、教育施設、物資購入など生活の根幹に関わる不安であった[鈴木 1985:84,85]。研究学園都市建設期は文字通り開拓の時代であり、当時の住民の様子を記した『長ぐつと星空』（筑波研究学園都市の生活を記録する会編）にならって、「長ぐつと星空の時代」ともいわれる。この中では新住民を受け入れる側としての旧住民の不安も記されている。当時の小学校教諭は以下のように振り返っている。

> 教育委員会から参りました転入生の名簿によりますと、保護者は殆どが博士、児童はいずれも附属小か大規模校からの転校、家庭環境も、経験も全く異なる子供達が、果たして地元の子達とうまく生活していけますかどうか、学識豊かなご父兄が、教育に対してはどんな考えを持たれて越して来られるのだろうか、どのような要求をなされるのだろうか、地元の人達とは円満にやって行けるだろうか、心配と不安は次々におきてきて、受け入れ前から頭が痛くなる思いでした[筑波研究学園都市の生活を記録する会 1981:102]。

このように不安ばかりからはじまった研究学園都市であったが、慣れない環境で奮闘する新住民と、それに応えようとする旧住民によって少しずつ生活環境は改善されていった。何もないところに突然放り出され、助け合いなしには生活が成り立たない状態であった新住民同士には互助的団結力がついた。何か不満、要望があれば、自分たちで団結して解決するという姿勢は早い段階から定着していた。新住民と旧住民の間にも交流は生まれた。土地のことを知らない新住民のサポートをしたり、生鮮食料品が手に入りにくい中で朝市を開いたりといった旧住民の協力は大きな助けになった[筑波研究学園都市の生活を記録する会 1981:22,84,88,118-121,151]。

新住民たちは新たな土地での生活に不便さを感じながらも、魅力も感じていた。それは広々とした景色や豊かな自然に対するものであった。それらの魅力を活かしたも

のとして代表的なものが「ゲリラ農園」である。まだ開発されていない公共用地を地元の農家と共同で耕し、自家菜園していたというものである。土に親しむだけでなく、安全食品を意識した無農薬栽培や有機農法などへのこだわりへと発展していった[筑波研究学園都市の生活を記録する会 1981:150-159]。また、1978 年に行われた住民意識調査では、「学園都市内や周辺には緑をできるだけ多く残し、自然破壊は最小限度にすべきである」という設問に対して「全くそのとおりだと思う」と回答した新住民は 90%に達している[上笹 1979:36]。このように、研究学園都市創設期の独特の環境の中で、人々は生活を自らの工夫によって向上させる、周辺環境を活かして楽しむといったことを体得していったと考えられる。このようなことを可能にしたのは、筑波研究学園都市が職住一体・近接のまちであったからであると島袋は指摘する。通勤時間がないため、家族と共に過ごしたり、自分の趣味を楽しむ時間を持つことができたのである(4)。また、職場も住居もつくば、交通機関もないとなれば、この地域での良さを活かして楽しもうという発想が生まれるのは自然なことである。

都市整備期に入ると、基本的な生活基盤も整い、以前のような旧住民と新住民の親密な交流は必要なくなっていった。道路の整備やデパートの進出などにより生活利便性や都市機能が充実するにしたがって、新住民の中にはこの地域での定住を望む人々も出てきた。大型の施設だけでなく、新住民の嗜好に応える気の利いた個人商店ができたことも、人々がつくばを気に入るきっかけになった[鈴木 1998:12,32,79]。

つくばのまちを気に入り、定住する意志が新住民の中に生まれてくると、地域のために活動しようという人々が登場しはじめた。もともと創設期から自らの力で生活を向上させるために団結するという土壌は存在していた。1990 年に設立された「暮しの企画舎」もその一つである。女性が活躍できる場を求めて、女性庭師を育てる活動や市有地内の花壇づくり活動を主に行っていた。この活動をさらに地域づくりに活かしたいという市、市民双方の意図が合致し、1998 年からは「つくばアーバンガーデニング」として市の援助を受けながら、花のまちづくりを担うようになった[蓮見 2009:200]。また、2001 年には、つくばの自然環境に魅かれた新住民を中心に「つくば環境フォーラム」が設立された。継続的な自然環境の保全と、自然をまちづくりに活かすことを目指したこの NPO 法人によって、自然や歴史文化を、体験を通して学ぶ自然学校が運営された。この中では、地元住民から学ぶことが多く、旧住民と新住民の交流を生む機会となった[田中 2007:22]。この他にもつくばには仕事や生活上の必要や趣味で横に

つながる多数のグループ活動やボランティア活動が生まれた。鈴木はこのような特徴を持つつくばを「遺伝子 ON の街」と呼んでいる[鈴木 1998:14-17]。

以上でみてきたように、筑波研究学園都市の建設によって職住一体・近接のまちができ、つくばの暮らしの中に趣味などの楽しみを持ち、他者と共有する人々が増えた。また、自らの生活の向上のために自発的に行動するという姿勢は、地域の魅力向上のための活動に発展した。このような能動的な住民たちによって「つくばらしい」魅力が醸成されていったと考えられる。

このような土壌ができてきたところにやってきたのが TX である。沿線開発によって新しくつくられるまちに、新しい住民がやってくる。このような TX 開業にともなう開発地への移住層は「新新住民」と呼ばれる[小林・斎尾 2009:342]。この新新住民がどのように地域に関わっていくかということが、今後のつくばの地域づくりにおけるキーポイントとなってくる。

3. 沿線開発に対する眼差し

宅鉄法に基づいて行われる TX の沿線開発が成功するか否かは、さまざまな事業者、人々にとって非常に大きな関心事である。そこにはそれぞれの立場からの期待や不安が存在している。

(1)つくば市

市内に約 1400ha の TX 沿線開発区域を抱えるつくば市は、沿線のまちづくりについて事業主体である茨城県などと積極的に協議を進める姿勢を示してきた。「つくばエクスプレス沿線開発により魅力あふれる居住環境や高次の都市機能が整備されることで、開発区域への人口定着に加えその波及効果が全市に及ぶ」[つくば市 2005:35]として、これを踏まえたまちづくりの推進を目指している。定住人口増加を見込んだ、魅力的なまちづくりのコンセプトとして掲げられたのが「田園市街地構想」であった。

(2)一般住民

筆者がつくば市内の TX 沿線開発地区に住む人々に行ったアンケート調査(5)の結果によると、回答のあった 96 戸のうち半数以上がつくば市内からの転居であった。市内から転居した理由として多数を占めたのが、駅に近い、TX による交通利便性、まちの発展性といったものであった。つまり、TX が開業し、沿線が開発されることによ

り、交通の利便性のみならず、より暮らしやすいまちができるという期待感を持っていることがわかる[6]。

しかし、その一方でつくば市内にはこのような沿線開発に否定的な見方をする住民もいる。筆者が2008年に筑波山麓地域の平沢地区で行ったインタビューで、当時この地区の区長を務めていた結束氏は、「TX 開通によって何か恩恵があったとは思わない。」と語った。平沢地区を含む旧筑波町は1988年、市町村合併によりつくば市に加わったが、住民は当時からつくば市民になったという意識はほとんど持っていなかった。都市化されていく研究学園地区と同じアイデンティティを持つことはなかったのである。そのため、TX の開業にも全く期待していなかった。期待するどころか、沿線の開発にばかり市の予算が使われ、その上市庁舎まで沿線に移転されてしまうという不満、格差感を感じていた[7]。

このように、同じつくば市内の住民でも、沿線開発に対する見方は対極ともいえるほどの違いがあった。このような住民間の意識の溝を埋めることが課題として浮かんでくる。

(3)茨城県、独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）

果たして沿線の土地は売れるのか。このことに最も危機感を抱いているのが、沿線の用地買収、区画整理を行ってきた茨城県、および独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）である。

宅鉄法の定める鉄道整備と沿線開発の一体型土地区画整理事業の手順は以下のような流れである。①住宅用地、公益施設用地、鉄道用地を生み出すため地方公共団体、住宅・都市整備公団、鉄道事業者等が地区内の土地を先買いする。②土地利用が決められ、先買いした土地を鉄道施設区内に集約換地する。③鉄道の整備と、公共施設の整備が進み、建物の建設がはじまる。さらに、公益施設などが整備され、総合的な街づくりが完成する[常磐新線整備推進課 1998] 。つまり、主体となる事業者は、まず鉄道建設予定地を含む周辺地域において大規模な用地買収を行う。その後、鉄道建設にあわせ区画整理を進め、商業施設誘致や宅地開発などの土地利用計画を決定。その計画に従い土地を売却することで、採算を取りながら、街をつくっていくという仕組みである。ここで事業主体となる地方公共団体が茨城県、住宅・都市整備公団が現在のUR 都市機構にあたる[8]。つくば市内の重点地域に指定されている島名・福田坪地区（万

博記念公園駅）を茨城県が、萱丸地区（みどりの駅）、葛城地区（研究学園駅）をUR都市機構がそれぞれ担当している。この3地区に、上河原崎・中西地区、中根・金田台地区を加えた5地区で、将来人口8万人を想定した大規模開発計画である[日本経済新聞社 2005:106]。

UR都市機構には筑波研究学園都市建設時に、前身である日本住宅公団が用地買収、区画整理を行ってきたという実績があるが、今回は状況が大きく異なる。研究学園都市建設の際に買収した土地は、新設・移転の国立研究機関や大学に引き取られることを前提としており、地元によるセールス活動不要であった。しかし、TX 沿線開発においては基盤整備完了後、買い主を見つけ、用地を売却して収支を合わせる必要がある[常陽新聞社 1997:190,191]。

用地の大部分を占める宅地開発をいかに行うかが争点となる中、つくばならではの魅力の必要性が叫ばれた。同じ沿線でも都心に近い埼玉県、千葉県では住宅需要が大きく、すでにベッドタウン化が進んでいる。パンク状態である常磐線沿線に対してのアピールもしやすかった。しかし、つくば市内においては新規人口を作り出していかなければならない。同じ都心から45分圏内の神奈川県などと比べれば地価の安さでの魅力はあったものの、それだけではない「なぜつくばに住むのか？」という問いに答え得る魅力ある街づくりを目指さなければならなかった。 [常陽新聞社 1997:207,251; 日本経済新聞社 2005:107]。

(4) まちづくり市民専門家[9]

人々がいきいきできる魅力的なまちづくりを目指して、大学やNPOなどを通して活動してきた市民専門家にとっても、TX の沿線開発は大きな関心を寄せる事業であった。TXによって都内と最短45分で結ばれるということは、つくばが東京への通勤圏になるということを意味する。そこで大規模な宅地開発が行われれば、つくばは単なるベッドタウンになりかねない。住民の関心、生活の中心が東京ばかりに向き、つくばのことを考えなくなれば、まちはどんどん魅力を失う。それまでのつくばで職住近接という環境が創り出してきた文化が失われるのではないかという懸念があった。また、茨城県やUR都市機構がどのようなまちをつくるのか、つくばの良さを知った上で、つくばらしいまちをつくってくれるのかという疑問も抱いていた。他地域と差別化のできない、これまでのニュータウンのようなまちをつくれば、人はやってこない

という危機感があった[日本経済新聞社 2005:38,192,193]。

4.「つくばスタイル」の誕生[10]

TX 沿線におけるまちづくりに対して、さまざまな思いが存在する中、最初に行動を起こしたのはまちづくり市民専門家たちであった。どんなまちができるのであろうか。既に存在するつくばの魅力が活かされるのであろうか。このまま官に任せきりでいいのだろうか。このような漠然とした不安感から、まずは市民が集まって、つくばの魅力についてのアイデアを出し合おうと、筑波大学助教授の渡を中心に、2002 年 9 月にワークショップが行われた。

筑波大学の地域貢献プロジェクトの一環として、「売れるつくば」と名付けられたこのワークショップには、つくば市に住む研究者、活動家、市民有志、学生など約 30 名が集まった。まず、それぞれが考える、つくばというまちが持つ資源とその活かし方を絵に表した。単に思い描くだけでなく、実際に視覚化し、共有することでアイデアを具体的な提案にまとめることを目的としていた。ここで生まれた 264 枚ものアイデア集を議論の中で整理し、15 の提案集にまとめあげた。提案集の一部を以下に紹介する。

・つくばミュージアムめぐり

まちを「どこでもミュージアム」と考え巡り蓄積された面白い活動や見方をまちに開いて楽しい市場やイベントを合体する。

・住民が主人公のまちづくり

様々な住民ニーズに多様な市民のタレントで答える、新たなビジネスやボランティア活動を促進。

・LIVABLE CITY

農と都市の合体した住みたくなるコミュニティの意識のために、つくばセンターにこそ「ファーマーズ・マーケット」をつくり、公共交通でつなぐ[11]。

このように、まとめられた提案集は、住民ならではの自由でユニークな発想が活かされた内容となった。

ワークショップにより提案集がまとまったところで、渡らが次に行ったのが、まち

づくりに関わる自治体、企業への働きかけである。一連のワークショップでの取り組みは、地元の有力スーパーマーケットである株式会社カスミの資金援助によりパンフレットの形でまとめ、発行された。このパンフレットを持って、渡らは自分たちのまちづくりアイデアを売り込みに行ったのである。渡によると、「売れるつくば」の「売れる」の意味は「つくばの売り」を探ることにあったが、それと同時に、多くの関係者を引きつけるキャッチーなタイトルを意図的に考えたという[渡 2006:49]。

これに興味を示したのが、沿線開発の事業主である茨城県と UR 都市機構であった。この 2 つの事業主は、宅地を売るために魅力的なまちづくりのあり方を模索する中で、売り手本位の発想では消費者をつかめないという危機感を感じていた。その解決策として、住民視点でのアイデアを持った市民たちと協働するまちづくりを目指そうと考えたのである[日本経済新聞社 2005:46,47]。より消費者を引きつける、新たなまちづくりを求めた事業主と、つくばの魅力を活かしたまちづくりを進めたいと望んだ市民。この出会いによって、事業主と市民との協働が始まった。つくばにはどのような魅力があるのかを認知していなかった県や UR の職員に対して、市民がマイクロバスツアーを実施したこともあった。

2003 年には、UR 都市機構茨城地域支社の呼びかけにより「TX 沿線まちづくりアイデア提供ワークショップ」が設けられた。渡を総合プロデューサーとして、大学、研究機関、市内の JA、商工会、NPO、学生らが参加し、7 月から秋にかけて、断続的に意見交換が行われた。ここでは、住宅地・まちづくり系で 4 つ、賑わい系で 2 つ、コミュニティサポート系で 1 つのワークショップが設けられ、行われた検討会は計 30 回にも上った(12)。これらの検討の成果については、翌年 1 月の「ステキ暮らしつくばエクスプレスまちづくりアイデア発表会」で紹介され、800 名もの参加者を集めた[渡 2006:50]。

このように、つくばでの生活において何が魅力なのか、何がアピールできるのかという議論は十分になされてきた。そこで次に課題となったのが、それをいかに発信するのかということであった。いくらまちに魅力があふれていても、それが広く認知されないと意味が無い。2004 年には、PR 戦略会議が行われることとなった。ここではこれまでの参加者に加えて、PR の専門家である大手広告代理店（博報堂）や関係の市町村も議論に加わることとなった。そんな中、参加者の中で使われはじめたのが「つくばスタイル」という言葉であった。

「つくばスタイル」が使われはじめた当初から、この言葉は複数の役割を担うものであったと考えられる。まずは、PR 戦略のキャッチコピーとしての役割である。宅地販売を目的とする PR にとって、つくばでの暮らしを一言で表す言葉の存在は非常に便利である。「スタイル」という言葉を使うことによって、単に「つくば」という土地を PR するだけでなく、そこでのライフスタイルを想起させ、生活の場としての「つくば」を印象付けることができる。

つぎに、沿線の宅地開発、まちづくりのビジョンを示す役割があげられる。「TX 沿線まちづくりアイデア提供ワークショップ」の中で繰り返し議論されてきた「つくばらしい」住居、まちというものを、ひとまとめに表す「つくばスタイル」という言葉によって、目指すべき共通のビジョンを持つことができたと考えられる。

最後に、市民たちが触れたり、感じたりしてきた既存のつくばの魅力を表現するためのコンセプトとしての役割があげられる。市民の知るこの地域の魅力は、多岐にわたっており、つくばの良さを一言で表現することが難しかった。その多様性も含めた魅力を表すものとして「つくばスタイル」が用いられたと考えられる。

また、この PR 戦略会議の中では、大手広告代理店がメディアプロデュースを行い、その発信内容である地域のコンテンツは地域のコミュニティビジネス組織や市民グループがつくる体制も生まれていった[渡 2006:50]。

その後、「つくばスタイル」はさまざまな場面で使われ、関連する取り組みも数多く行われるようになった。そのため、個々の組織の連携と情報交換体制を構築して情報を共有し、効果的な情報発信を行うという課題がうまれた。このような事業の運営を行うために、「つくばスタイル協議会」が 2007 年 5 月に設立された(13)。茨城県、UR 都市機構、つくば市、つくばみらい市、守谷市によって構成されている。翌年には「地域を訪れる方、地域にお住まいの方、地域で働く方などをつなぐシンボル」[つくばスタイル協議会 2008]として「つくばスタイルコミュニケーション・マーク」が制定された。つくばの魅力を広くわかりやすく PR する「つくばスタイル」の趣旨に賛同する団体が「つくばスタイル」という言葉、および「つくばスタイルコミュニケーション・マーク」の使用を申請、承認を受けて使用するというものである。

第3章　「つくばスタイル」の検証

1. 拡がる「つくばスタイル」

(1)「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」

PR 戦略の「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」を利用するのは、主に「つくばスタイル」という言葉の使用規定を設け、管理しているつくばスタイル協議会であると考えられる。つくばスタイル協議会のウェブサイト内で、この言葉は以下のように定義されている。

> 知的な環境の中で、都市の利便性と豊かな自然、これらの魅力をあわせて愉しみながら、自分の希望に合わせて、住み、働き、学び、遊ぶ。それが「つくばスタイル」なのです[14]。

また、ここでつくばの魅力として挙げられている「知的な環境」、「都市の利便性」、「豊かな自然」という要素の具体的な内容については、以下のように記述されている。

> 【 都市 Urban 】
> つくばエクスプレスにより東京から 32～45 分という利便性を実現。沿線は、高度な都市インフラを備え文化施設や商業施設も続々と建設され、教育、福祉、医療など快適な暮らしの機能もますます充実。
> 【 自然 Nature 】
> 里山の自然にふれるもよし、市民農園[15]での農作業でエコロジカルな体験をするもよし。そこにあるのは、豊かな自然環境が生み出す充実のアウトドアライフです。
> 【 知 Intelligence 】
> 大学や先端的な研究施設などが集まるつくばエリアには、知の集積があります。サイエンスツアー[16]で科学のまちを手軽に体験できるほか、洗練された文化や芸術にも気軽に触れ合えるつくばならではの、高度な教育環境も整っています[17]。

以上、これらの記述から読み取れる「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」が指すものは、「都市」、「自然」、「知」がバランスよく存在するというつくばの魅力を活かし、自分なりに楽しく生活するライフスタイルのことであると考えられる。ここでのライフスタイルを実践する主体に関しては、特に限定されているということはない。しかし、つくばでの暮らしを効果的に PR するというつくばスタイル協議会の目的から考えて、想定されている受け手は新興住宅地に転居してくる可能性のある人々である。つまり、ここで示されているライフスタイルは、新たにつくばにやってくる人への提案であり、主体はやはり新新住民になる可能性のある人であると考えられる。

このことは、実際の分譲情報を掲載している UR 都市機構のウェブページにおいて、より明確に読み取れる。ここでは、つくば市内でも最も大規模な開発が行われ、今後つくば市の副都心となることが期待されている研究学園葛城地区の分譲情報を取り上げる。

＜タウンコンセプト＞

都市、自然、知の調和から生まれる新しい暮らし方「つくばスタイル」を提案。

新しい文化にふれあう暮らし

・つくば駅に近接。商業・文化施設などが集積

・コンサートやシンポジウムなどが頻繁に開催

・個性派レストランやカフェ、こだわりのショップがいっぱい

“知”を刺激する暮らし

・周辺には最先端の研究施設が多数

・インターナショナルな教育環境

・趣味、育児、交流などのサークル活動が活発

心安らぐ緑のある暮らし。

・駅前には森を残した都市型公園

・筑波山を望む豊かな自然環境

・つくばの副都心としての身近な緑や公園が多数[18]

新新住民に対して、つくばスタイル協議会と類似した「つくばスタイル」の提案をしていることがわかる。

また、ここで挙げられているつくばの魅力の内容に注目してみると、東京への交通利便性、駅前の公園などは沿線開発地区における魅力である。これに対して、商業・文化・研究施設の集積、コンサートやシンポジウムなどは研究学園地区、筑波山、里山の自然などは周辺農村地区の魅力である。つまり、「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」で示されるつくばの魅力とは、沿線開発地区の今後の発展というものと、もともと研究学園地区や周辺農村地区に存在した魅力の両方の要素を含んでいる。しかし、ここではつくばに住むことで得られる周辺環境の紹介にとどまり、具体的な暮らしの様子を見出すことはできない。

(2)つくばスタイルフェスタ 2005

1)概要[19]

「つくばスタイルフェスタ 2005～ステキ暮らしワクワク体験～」は 2005 年 8 月の TX 開業にあわせて開催された、TX 沿線まちづくりキックオフイベントである。会期は同年 10 月 1 日から 31 日までの 1 ヶ月間、会場はつくば市葛城地区内、研究学園駅北側の特設会場だ。この名称に決定される以前は「つくば住まいと暮らし博」と呼ばれていた。茨城県、UR 都市機構、つくば市、守谷市、伊奈町、谷和原村（現つくばみらい市）が主催者となって、「TX 開業を首都圏内外に強くアピールすると同時に、TX 沿線に住めばどんな暮らしができるのか、モデル住宅などを提案して新住民を呼び込むこと」[日本経済新聞社 2005:30]を目的としたイベントであった。

このイベントでは、一番街、二番街、三番街、一、二番街を結ぶウェルカムストリートという 4 つのエリアによって会場を構成し、それぞれで企画が行われた。

研究学園駅を出てすぐ、イベントの玄関口となる一番街、ウェルカムストリートには一面のフラワーガーデンが登場した。さらに、地元の人々が物販、フリーマーケット、ギャラリーなどを出し、来場者を迎えた。

メイン会場である二番街は、住まい、自然、食文化をキーワードとした体験ゾーンとなった。「まち・すまい・くらしのデザインゾーン」では生活関連企業による「つくばスタイル」の提案が各ブースで行われた。「自然とのふれあい体験ゾーン」では、里山散策、そばの刈り取り、そば打ち、釜屋の土壁塗りや茅葺きなど、豊かな自然と触れ合う体験プログラムが用意された。また、約 120 年前に建てられた市内の古民家が移築、再生され、昔ながらのつくばの生活が再現された。「食と文化・エンターテイメ

ント体験ゾーン」では、つくばの食材を使ったオリジナルメニューを提供する「フードコート」と「つくばカフェ」が出店し、つくばの味をふるまった。また、その隣に設置されたステージではさまざまな音楽コンサートも行われた。

三番街はイメージリーダー街区と名付けられ、13の住宅事業者によって、実際に分譲される住宅が展示、公開された。また、住宅が並ぶまちなみも専門家によって設計されたものであった。

この他にも会場を飛び出して、つくばの名所を巡る「つくばスタイルバスツアー」が実施されるなど、「つくばスタイル」に関するさまざまなアイデアが盛り込まれたイベントとなった。期間中の来場者は21万3000人にのぼり、大盛況のうちに幕を閉じた[首都圏新都市鉄道株式会社 2005]。

2)考察

このイベントはTX沿線に新しいまちができるということを、多くの人々に広く発信し、体感してもらおうという試みである。つまり、「沿線まちづくりビジョンとしてのつくばスタイル」を具現化し、PRする場であったと考えられる。ここでいう「つくばスタイル」を実践するのは、将来沿線地域に住む人である。

研究学園駅前で行われたフラワーガーデニングや市民による出店は「売れるつくばアイデア集」で提案された「駅から見える花とカフェのある公園」を実現したものである。その他にも、「ぼくらの駅には森がある」のイメージにもとづいて、できるだけ多くの既存樹木が残された二番街や、そこに登場したフードコードは「筑波山の見えるスカイガーデンカフェ」をイメージさせるものであった[渡 2006:51,52]。ここで挙げられているのは、市民が描いた「つくばスタイル」を実現するまちの姿であると考えられる。ここからは「自然との共生」といった要素が読み取れる。

メイン会場である二番街の「まち・すまい・くらしのデザインゾーン」で提案された「つくばスタイル」はとてもユニークなものであった。燃料電池を使った21世紀型の環境共生住宅や、最先端の情報通信ネットワークの紹介などからは、「科学技術の先端性」といったものが感じられる。また、画家の片岡鶴太郎がプロデュースした「アートハウス」での作品展示などには「芸術・文化」といった要素が含まれている。

また、イメージリーダー街区と呼ばれた三番街は、建築家、まちづくりの専門家などにより「住人が自らの手でともに街や地域をはぐくみ、価値を創りあげる」[石崎

2006:55,56]というコンセプトのもと設計されたものであった。街区構成においては、「個と共の空間的な相互関係が生まれる中庭のような居住環境のデザイン」[石崎 2006:56]が目指され、さまざまな工夫がされた。また展示された住宅についても、「つくばスタイル」という暮らしの提案を確立するための詳細な建築指針が UR 都市機構から住宅事業者に提示されていた。この中では、いくつかのテーマが設定されており、それを満たす住宅を建てなければならなかった。住宅の仕様に関するものでは「環境共生」、「高度情報化対応」が挙げられ、生活スタイルでは「農・アウトドア」、「食へのこだわり」、「ペットとの共生」、「子育て・福祉」、「趣味・アート」といったテーマが設定された[石崎 2006:54-56]。ここでは、住宅事業者やまちづくりの専門家からの「つくばスタイル」を実践するための住宅地が提案されたと考えられる。

以上でみてきたように、さまざまな個人、団体が提案するつくばの新しいまちでの暮らしがすべて「つくばスタイル」として紹介されている。ここでは「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」には含まれない要素が多く取り上げられ、「つくばスタイル」の意味の拡がりが読み取れる。

このイベントでもう 1 つ注目したいのは、ここでは 2 重の「つくばスタイル」が登場していることである。1 つは、先ほどから述べているとおり、「沿線まちづくりビジョンとしてのつくばスタイル」である。そしてもう 1 つが、「つくばの魅力を表現するコンセプトとしてのつくばスタイル」である。このイベントでは、つくばで暮らすと身近に触れることのできる、さまざまな既存の魅力を紹介している。古民家の再生や、自然と触れ合う体験、地元食材を使ったメニューの提供、つくばスタイルバスツアーなどがこれにあたる。既存のつくばの魅力をまとめて指すこの「つくばスタイル」は最も多様性を含んでおり、つくばにあるものならすべて該当するのだろうかといった疑問も生まれる。そこで、次節では Mook 誌『つくばスタイル』を分析することで、このつくばの魅力を表現するコンセプトとしての「つくばスタイル」について考察を進める。

(3)Mook 誌『つくばスタイル』

1)概要

大手広告代理店と地域の市民グループの協働作業の一つとして生まれたのが、Mook 誌『つくばスタイル』である[渡 2006:50]。これは『軽井沢スタイル』や『湘南スタイ

ル』などを手がける椎出版社による地域別ライフスタイル誌のつくば版である。2004年12月に初刊が発刊され、2009年9月には9巻にまで至っている。この雑誌を作成するための情報収集について、編集者の朝比奈氏は、「ただただ多くの人と会うようにしているだけ」、「彼ら、彼女ら（ここではつくばで出会った人々を指す）からのローカルな情報が雑誌作りの根底を支えてくれている」[『つくばスタイル No.3 2006:127』]と述べている。ここからわかるように、『つくばスタイル』は市民から得た情報で、ローカルでリアルなつくばでの暮らしを紹介している雑誌であるといえる。つまり、この雑誌で取り上げられている内容には、市民が「つくばスタイル」と感じているものが反映されていると考えられる。

2)考察

まず、全9巻の表紙の最も大きな文字で書かれている題字に注目したい。1巻から9巻までの題字は以下の通りである。

1巻（2004年12月）「ほどよく都会」都心から45分の粋な田園生活「豊かな自然」
2巻（2005年9月） 都心へ45分のつくば暮らし、はじめませんか？
3巻（2006年6月） 新しいつくば、まるごと全部、紹介します。
4巻（2007年4月） つくばエクスプレスで繋がる、「つくば」と「東京」
つくばに住む、つくばで働く。
5巻（2007年9月） 心豊かな“農”ある生活。
6巻（2008年4月） “わんぱく天国”つくば
7巻（2008年9月） 続・里山ルネッサンス。
8巻（2009年3月） つくばに住めば、自然と暮らしはエコになる。
9巻（2009年9月） 筑波で見つける、古き良きニッポン。

1巻の「都心から45分」、2巻での「都心へ45分」という記述や4巻の題字からは、つくばと東京との距離の近さが読み取れる。TX の開業により、つくばはもう都心から遠く離れた存在ではなくなった、気軽に行けるところだという印象付けがされている。これは TX 開業、沿線開発にともなう PR という文脈で生まれた『つくばスタイル』には当然必要な要素であると考えられる。しかし、5 巻以降は東京との近さに代

わって、それぞれ違ったテーマに基づいた記述がされている。5巻では「農」、6巻では「わんぱく天国」＝「子育て」、7巻では「里山」、8巻では「エコ」、9巻では「古き良きニッポン」＝「歴史」、といったように、多岐に及んでいる。

つぎに、この雑誌のメインコンテンツともいえる、つくばに住む人々のライフスタイルの紹介の記事をみていきたい。5巻以降は、先に挙げた題字と同じテーマに基づいて特集が組まれている。ただし、9巻は「スポーツ」をテーマにした特集となっている。4巻は題字にもみられるように、つくば、東京間の「通勤」をテーマにしている。そして、1巻から3巻までをみてみると、それぞれの特集のタイトルは以下の通りである。

1巻：つくば在住8家族のライフスタイル
　　里山のモダン＆メローな暮らし
2巻：住んでこそ実感する、里山のオンリーワン・ライフスタイル
　　ココロとカラダが喜ぶオーガニックライフ
3巻：つくばでのんびり農業と子育て
　　たおやかな里山の暮らし

ここからみてもわかるように、共通してキーワードとなっているのが「里山」である。これは7巻でも「続・里山ルネッサンス」として取り上げられている。このように、里山で暮らすということが『つくばスタイル』の中では重要な要素であると考えられる。では、その「里山」をキーワードとしている1巻から3巻までの特集に焦点を当てて、記事の具体的な内容についてみていこう。

まず確認しておきたいのが、これらの特集で紹介されているのは、先に挙げた「キャッチコピーとしてのつくばスタイル」や「沿線のまちづくりビジョンとしてのつくばスタイル」を実践する人々ではないということである。それは実際に紹介されている人々の居住地をみれば明らかであるし、発刊時期がTX開業前、もしくは開業直後であるので当然のことである。ここで紹介されているのは、もともとつくばに住んでいて、市民たちや編集者から「つくばスタイル」を実践していると認識されている人々である。さらに、ここで紹介されている人々の居住地をみてみると、1、2巻での「里山」と3巻での「里山」には違いがあることがわかる。3巻では、「筑波山の山麓に広

がる里山の自然はこのエリアで暮らす最大の魅力かもしれない」[『つくばスタイル No.3』2006:16]という記述からもわかるように、筑波山麓地域の里山に焦点を当てた特集となっている。これに対して、1、2巻で紹介されている人々の居住地は、大角豆、東光台、遠東、神郡など市内に広く点在している。つまり、3巻での「里山」は筑波山麓のことであり、1、2巻での「里山」は広く田園都市としてのつくば全域を指していることになる。では、『つくばスタイル』発刊初期における「田園都市つくば」における暮らしの記述を1、2巻から詳しく分析していきたい。

1、2巻では、合計16の人々の暮らしぶりが紹介されている。まず、つくばの周辺環境については、「筑波山」、「広い空」、「草花の香り」、「田畑豊か」、「田園のみどり」、「広い土地」など、田園的な情景を想像させる記述が目立つ。また、「中心地は都会で賑わっているけれど、ちょっと入るとこういう静かな農村と自然が残っていて」、「田舎の生活に飽きたら、都会にも簡単に行ける」、「都会的な自由な暮らしと、地方的なきずなの暮らし」、「田舎のような泥臭さがなく、都会のような騒がしさがない」といった記述から、「ほどよく都会」といわれるような田園都市的要素が読み取れる。つぎに、住人の属性という観点から、ここで登場する人々の職業に注目してみたい。職業が明記されている18人のうち、彫刻家、陶芸家、画家などの芸術家が8人、建築家、造園家が4人、大学の教員が2人、その他は元大手出版社、通信会社、銀行勤務となっている。ここから、つくばには文化、知的水準の高い人が多いというイメージが付与されていると考えられる。また、「つくばは誰にでも優しい場所」、「一家がつくばに移り住んだとき、周囲の人々はとても温かく迎えてくれた」、「皆に『よそ者』という意識がなく、自然に受け入れてもらった」という記述から、新しい人にも優しく、開かれた土地柄であることがうかがえる。このように、「つくばスタイル」という言葉でよく表現される、「都市」、「自然」、「知」に加えて、「新しい人に開かれた」といった要素を確認することができる。

続いて、暮らしについての記述をみていく。つくばでの暮らしを形容する言葉として、特定の言葉の繰り返しの使用は見受けられない。しかし、紹介されている16事例のうち、暮らしに関する記述がみられたのが12事例、その中でも8事例において、「ゆったり」、「やすらぎ」、「穏やか」、「ゆとり」、「リラックス」、「心を和ませる」、「ゆっくり」、「のんびり」、「のびのび」、「肩ひじ張らない」といった記述がみられる。このような、時間がゆっくり流れるスローライフ、また自然体というものが「つくばスタ

イル」のイメージの一部をつくっているといえる。

最後に、人に関する記述をみていく。以下に、1、2巻に登場する人々のと、記事の内容の抜粋を列挙する。

(a) Aさん夫妻：造園家、篆刻家

「自然に埋もれる家に暮らす、造園家と篆刻家夫妻。」

i)「20数年前に学園都市の造園の仕事で初めてつくばを訪れた。その際に、筑波山麓の村の景色に魅入られてしまった」

ii)『6年前に移住を決意し暮らす場所をつくばで探し始めた。(中略)「五万分の一の地図を持って探し回った。(中略) ここら辺の沢沿いの土地はほぼ探検し尽したと思う。」』

「大きく土をいじらない、水の道を触らない、太陽には抗わないで人間が住む（中略）これが、このつくばの棲み処のコンセプト」[『つくばスタイル』2004:20-25]

(b) Bさん夫妻

「週末の楽しみは古民家での穏やかな時間。」

ii)「ギャラリーや飲食店などにして、古民家の雰囲気を残したいというオーナーから『個人には譲れない』と断られるも、めげずに何度も通って、やっと手に入れることができた」

iii)「古いもの、味わいのあるものが好きなんです。新しいものを買うのはすごく簡単なのだけど、それはちょっと嫌で」

iv)「みんなでワイワイやるのが大好き（中略）誕生会やお月見、雛祭りなどイベントは欠かせない」[『つくばスタイル』2004:30-33]

(c) Cさん夫妻：美大助教授、立体造形家

「筑波山にそびえたつ、シンプルな黒い家。」

i)「以前に一度、筑波山へ遊びに来たのがきっかけでした。その時、『こんな素敵な場所があるのか!?』と驚きました」

ii)「なるべく自然を残しつつも、土地を拓いて理想とする家づくりの土台

を作っていった」[『つくばスタイル』2004:34-39]

(d) Dさん：レストラン経営、元大手出版社勤務

「100年の家で愉しむ温故知新のある日々。」

ii)「気軽な交流の場としての性格は残しつつ、より現代的でくつろぎやすく改装した」

iii)「料理の大半は、自身の手で育てられた無農薬の作物たち。(中略) 首尾一貫しているのは、主張するところは主張するがけっして我を通すのではなく、守るべきよき伝統はきちんと守っている」

iv)「最近はお茶会や農場クッキング、音楽イベントなども開催する。(中略) じつに多くの人が出入りする」[『つくばスタイル』2004:40-43]

(e) Eさん夫妻：元銀行員

「筑波山の参道で、囲炉裏を囲んでの暮らし。」

i)「この神郡に愛着を抱き、念願かなってこの地に住み始めた」

iv)「この地に住みたかった理由がある。それは愉快な友人たちの存在。(中略) 彼らと心ゆくまで、毎週末に酒を酌み交わしたいという気持ちが、最後には決め手になった」[『つくばスタイル』2004:46,47]

(f) Fさん

「離れた場所に別荘なんていらない。この場所での生活がデュアルライフなのだから。」

ii)「このログハウス、Jさんが仲間の手を借りながら、約1年かけて、自らの手で完成させたもの。つくると決めたときには、全く知識なしの状態だった」

iii)「まず自分が楽しむ、楽しいと思うことを、わがままにすることが身上。それに賛同してくれればうれしいし、やりたいやつがやればいいというスタンス」

iv)「Jさんの交友関係は広い、つくばの魅力的な人物は、なぜか彼をみな知っている。」[『つくばスタイル No.2』2005:26-30]

(g) Gさん：画家

「生活が創作を喚起する、手づくりの古民家再生空間。」

i)「客観的なものごとの見方ができるようになったのも、つくばでさまざまな人に出会ってからのことです。つくばは、緑が豊富だとか、都会的生活も送れるとか、簡単に見つけられる良い部分とは別に、そういう場所だからこそ、自分にとっての特別を探しやすい街」

ii)「空き屋になる民家を好きに改装していいと言ってくださって、(中略)低予算しかなく、自分でできることはなんでもやろうとはじめた」

iv)「積極的にたくさんの方と知り合い、話をすることにおもしろさを感じている。(中略) いろんな考え方を知っていきたいから、やっぱり人との出会いは大切にしたい」[『つくばスタイル No.2』2005:32-37]

(h) Hさん

「筑波山を一望できる、隠れ家的、庵。」

i) この広大な裏筑波の山なみを見渡せる場所に魅せられて」

ii)「土を耕し、自宅から草木を運ぶ。日々成長する雑草と格闘する。人数を使っても大変な労力を必要とするが、可能な限り自分で手を入れた」

iv)「ひとりで来ても意味がないんですよね。家族、友人、親しい人と一緒に楽しく過ごすための庵なんですから」[『つくばスタイル No.2』2005:50-53]

(j) Jさん夫妻：芸術家

「つくばの森にたたずむアトリエハウス。」

i)「地元つくばの景色は色褪せることはなかった。(中略) いつかは地元に戻り、豊かな自然の中で創作に没頭したい」

ii)「自分たちの手で出来る内装などは、施工せずそのまま引き渡してもらえないだろうか」

iv)「学生だけでなく、子どもからお年寄りまで、幅広く絵の楽しさを感じてもらえる場所にしたい」[『つくばスタイル No.2』2005:55-57]

以上、ここまでの抜粋をみていく中で特筆すべきは、全員に共通して何らかのこだわりを持って暮らしているということである。まずⅰ)と示された記述について注目してもらいたい。ここから読み取れるのは、つくばという場所に対するこだわりである。魅力を感じている部分はそれぞれ違うものの、つくばという場所に意味を見出し、自らの暮らしの場所としてつくばを選択していることがわかる。またここで挙げた以外の人々も、きっかけはどうであれ、転居後つくばの魅力に触れ、愛着を持って暮らしている様子が描かれている。

つぎに、ⅱ)の記述をみていくと、そこからは並々ならない住居に対するこだわりがうかがえる。記事で紹介されているうち、実に 12 組もの人々が自邸の設計、建設、改装などのいずれかを自らの手で行っている。建物には関与していなくても、庭づくりにおいて可能な限り自分で手を入れるといったようなこだわりもみられる。同時にここからは「手づくり」というキーワードも浮かんでくる。理想の住環境を手に入れるために、人任せではなく、自らの手で作り上げていくという姿勢が共通して読み取れる。

つぎに、ⅲ)の記述に注目していただきたい。ここではものの考え方、生き方に対する独自のスタンスがよく表れている。これについては住居へのこだわりに表れている場合も多いが、日々を能動的に暮らす姿が共通して見受けられる。

以上でみてきた、暮らしへの「こだわり」というものが、Mook 誌『つくばスタイル』で紹介されている人々に共通にみられる特徴の 1 つである。

また、もう 1 点特徴的なのは他者との関わり方にみることができる。ⅳ)の記述に注目していただきたい。みな他者との交流を楽しんでいる様子が描かれている。こだわりや自分のスタンスを持っているというと、他人には興味がないのではと想像されがちであるが、ここに登場する人々はそうではない。人と共有すること、人から学ぶことを積極的に行っている。

以上のことをまとめると、『つくばスタイル』1、2 巻の中で描かれている「つくばスタイル」とは、「都市」、「自然」、「知」が融合した「新しい人に開かれた」環境の中で、こだわりを持ち、仲間と交流しながら、ゆったりと暮らすことといった表現で集約される。3 巻においても、居住地を里山に絞ってはいるが内容に特筆すべき点は見当たらない。

しかし、TX 開通から約 1 年半が経った 2007 年 4 月に発刊された 4 巻では、新たな人々が紹介されている。新新住民たちである。沿線開発地区の新興住宅地に住み、東京に通勤するといった暮らしをする人々も「つくばスタイル」として紹介されている。これは沿線に人が住み始め、これまで紹介されてきた「沿線まちづくりビジョンとしてのつくばスタイル」を具現化する人々が現れたということになる。当然、沿線の PR という目的で発刊されている雑誌であるので、このような人々の暮らしも「つくばスタイル」として紹介している。

5 巻では「農」というテーマのもとに、旧、新、新新いずれの住民も紹介されている。研究学園都市ができる前からつくばに住み農業に従事している人も、転居してきて週末に菜園を楽しむようになった人も同じように紹介されている。ここから、つくばの魅力にさまざまなスタンスで関わることができるということが示されている。新新住民の登場により、新たな「つくばスタイル」が示されるようになった。

また、9 巻の中では、つくばの新しいスポーツイベントに多くの紙面を割く反面、北条といった昔ながらの筑波の特集も組んでいる。こういった Mook 誌『つくばスタイル』の内容の拡がりは、新しいものも、古いものも、みんなつくばの魅力になるということを感じさせる。これまで農村部＝旧住民、研究学園地区＝新住民、沿線開発地区＝新新住民という、人々の意識の中に存在していた境界を越えて、みんなを巻き込んでいこうという姿勢がうかがえる。

(4)「つくばスタイル」の根底にあるもの

ここまでみてきたとおり、「つくばスタイル」はあらゆる要素を含み、実態の掴めないものになっている。

> 『「つくばスタイル」には、こうだから「つくばスタイル」だといえるような明確な定義があるわけではない。捉えどころのない、もやもやしたものであるからこそ、あらゆるものを許容し、認め合うことができる。捉えどころがないから、みんながいつまでも追い求めることができる[20]。』

これは筆者が行ったインタビューの際、「つくばスタイル」の提唱者ともいえる渡が語った言葉である。確かに「つくばスタイル」には明確な定義がない。それぞれの

人がそれぞれに思い描くものがすべて「つくばスタイル」となり得る。

しかし、ここまで行ってきた考察を踏まえて、筆者は「つくばスタイル」の根底に共通して存在するいくつかの要素があると考える。まず「つくばスタイル」を示す表現の中では、繰り返しつくばの魅力を活かすということがいわれている。つまり「素材を活かす」ということである。ここでいう「素材」というのは、木材や食材といった材料としての意味にとどまらず、その土地にあるもの、そこから得られるもの、人の素質なども含んでいる。Mook 誌『つくばスタイル』に登場する人々も、周辺の景観や環境を活かした暮らしをしている人々であった。

2 つめは「独自のスタンスを持つ」ということである。これは Mook 誌『つくばスタイル』の分析の際に「こだわり」として繰り返し述べてきたことである。またつくばスタイルフェスタ 2005 において住宅にテーマを設けることが求められたのは、住民が暮らしに自分なりのテーマを持つということである。また、キャッチコピーの定義にある「自分なりに」という表現にも結びつく。

そして最後に 3 つめが「他者と交流する」ということである。これも Mook 誌『つくばスタイル』の分析で指摘した通りである。また、沿線住宅地のコンセプトに「個と共の空間的な相互関係が生まれる」、「住人が自らの手でともに街や地域をはぐくみ」という表現が含まれていたことからも読み取ることができる。

このような観点から前項で取り上げた Mook 誌『つくばスタイル』の 3 巻以降の特集をみていくと、里山、農、子育て、エコ、歴史といった、関係性が見出せないテーマも、それぞれのこだわりの表れとして捉えることができる。ただ闇雲に地域にあるものを巻き込もうとしているわけではない。単に農業をしながら暮らすことが「つくばスタイル」というわけではないのである。つくばで農業をするということにこだわりを持つ、もしくは農業をするというこだわりを実現する場所としてつくばを選んだ人々が、自分のスタンスで生活を楽しんでいる。また周囲の人々とその暮らしを共に楽しんでいる。このような姿があるからこそ、農というテーマが「つくばスタイル」になり得るのである。なぜ、筑波山麓が Mook 誌『つくばスタイル』で紹介されているのか。それは、筑波山麓の魅力に愛着を持ち、こだわりを持って、より多くの人々とのつながりを求めて活動している人々の姿があるからである。

「素材を活かす」、「独自のスタンスを持つ」、「他者と交流する」。この 3 つの要素が「つくばスタイル」の根底にあると考えると 1 つ気が付くことがある。それはこれら

の要素が、前章で取り上げた「つくばらしい」魅力に非常に似ているということである。表面上では多様な素材が取り上げられ、拡がりをみせているようにみえる「つくばスタイル」であるが、実はこれまで住民たちが育んできた魅力の延長上にあるものであるということができる。そこには一貫した地域への関わり方、暮らしのあり方が存在していたのである。

(5) 一般住民からみた「つくばスタイル」

ここまで、イベントや雑誌で表現される「つくばスタイル」について分析をしてきた。では、これらの受け手として一般住民は「つくばスタイル」をどのように捉えているのであろうか。ここでは、筆者が行ったアンケート調査に基づいて住民レベルでの「つくばスタイル」について考察する。

1) 調査概要

この調査はつくば市研究学園葛城地区の、マンション及び戸建て住宅に住む人々を対象に行ったものである。この地区は TX 研究学園駅周辺に位置し、つくば市内の沿線では最も大規模な宅地開発が行われている。また、2008 年には沿線最大規模のショッピングセンター「イーアスつくば」がオープンし、2010 年にはつくば市新市庁舎の移転が予定されている。今回対象にしたマンション、住宅地はこの地区の中でも最も開発時期の早かった場所であり、2006 年、2007 年の入居が中心であった。

調査方法は対象となる住居にアンケート用紙をポスティングし回収するというものである。回収にあたっては、マンションではエントランスに設置した回収ボックスにて行い、戸建て住宅については同封の返信用封筒にて郵送してもらう形をとった。調査期間は、マンションでは 2009 年 10 月 22 日から 11 月 1 日まで、戸建てでは 2009 年 10 月 24 日から 11 月 3 日までとした。ポスティングを行った戸数はマンション 190 戸、戸建て 155 戸、そのうち回収ができたものがマンション 49 戸、戸建て 47 戸であり、回収率は約 28%となった。

2) 調査結果

表 1 は住民の現居住地に移転してくる以前の居住地を、マンション、戸建てごとに示したものである。マンション、戸建てによる差異は特に見受けられない。これは他の設問でも同様である。ここでは、住民の半数以上がつくば市内からの移転となって

いる。また市内でも、吾妻、二の宮、春日など主に学園地区からの移住が目立つ。県内では、土浦市や牛久市など隣接地区からの移転が多い。県外からは埼玉県、千葉県からの移住が最も多い。

表 1　転居前の居住地

	つくば市内	市外 茨城県内	県外 関東圏内	その他	不明	計
マンション	23	12	12	2	0	49
戸建て	26	9	8	2	2	47
計	49	21	20	4	2	96

（筆者の調査に基づく）

つぎに、「つくばスタイル」という言葉の認知度であるが、転居前、転居後について、それぞれ表 2、3 に示す。転居前から市内では 90%以上の認知度があり、県外からの移転者においても半数以上が認知している。しかし、『転居を考える上で「つくばスタイル」というコンセプトから何らかの影響を受けましたか？』という設問に対し、「はい」と回答したのは全体の 1 割にとどまっている。転居後は全体の 95%が認知しており、一般住民にも広く知られている言葉ということができる。

表 2　転居前の「つくばスタイル」認知度

前居住区別	認知	非認知	計	%
つくば市内	45	4	49	92
茨城県内	17	4	21	81
県外	16	10	26	62
計	78	18	96	81

（筆者の調査に基づく）

表 3　転居後の「つくばスタイル」認知度

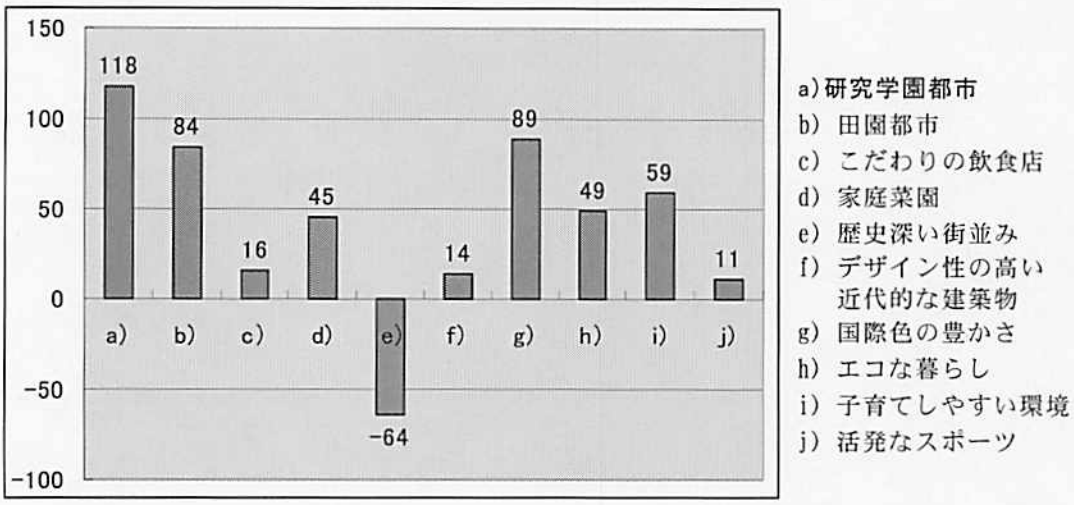
前居住区別	認知	非認知	計	%
つくば市内	48	1	49	98
茨城県内	19	2	21	90
県外	24	2	26	92
計	91	5	96	95

（筆者の調査に基づく）

つぎに、a）研究学園都市、b）田園都市、c）こだわりの飲食店、d）家庭菜園、e）歴史深い街並み、f）デザイン性の高い近代的な建築物、g）国際色の豊かさ、h）エコな暮らし、i）子育てしやすい環境、j）活発なスポーツ、という 10 項目を提示し、「つくばスタイル」というコンセプトにどの程度当てはまるかを評価してもらった。ここで挙げた項目は Mook 誌『つくばスタイル』で取りあげられているトピックを、筆者が分類し項目としたものである。評価は 1：全く当てはまらない、2：当てはまらない、3：どちらでもない、4：当てはまる、5：当てはまらない、の 5 段階で行ってもらった。図 1 で示したのは、「3：どちらでもない」を 0 点として点数化したものの合計を示している。グラフが上方に高いものが、よく当てはまると評価されたものであり、下方に伸びているものは、当てはまらないと評価されているということになる。

ここで高い点数となっているものに注目すると、「研究学園都市」、「田園都市」、「国際性の豊さ」といった項目が挙げられる。やはり、1970 年代からこの地域の大きな特徴である「研究学園都市」、「田園都市」というイメージが根強く残っていることが明確に表れている。記述式の回答の中でも、「つくばスタイル」を「都市と自然が調和している」、「便利だけどのんびりしている」と表現する記述が多く見受けられた。また、「国際性の豊さ」という要素も研究学園都市というまちの性質上生まれた特徴である。逆に「歴史深い街並み」の点数が極端に低いことから、周辺農村部を「つくばスタイル」から切り離して捉えていると考えられる。あくまで「つくばスタイル」は都市部のことを指して使われる言葉として認識されていることがわかる。また、Mook 誌『つくばスタイル』の中でも多くの紙面を割いて紹介されている、「こだわりの飲食店」への評価が低いのが筆者の予想を反した。

図 1　項目別「つくばスタイル」認識度



（筆者の調査に基づく）

続いて、『現在の生活の中で「つくばスタイル」らしい暮らしを実践していると思いますか？』という設問に対して、半数近い 44 戸で「はい」という回答が得られた。この中で記述式の回答があったのが 33 戸。具体的な内容については、公園での散歩、ウォーキング、サイクリングなどを楽しんでいるという記述が最も多く、19 戸でみられた。ついで、家庭菜園、ガーデニング、市民農園での野菜作りを挙げたのが 10 戸、研究所見学や外国人との交流を挙げたのが 8 戸あった。この中には、「ベンチャー企業立ち上げ、趣味を活かしお菓子教室、ファミリー農園、サイクリング、ウォーキング、焼き立てパンを食べる、手作りラズベリージャム、夕食後映画、イーアス散歩、新米が安い、りんりんロードの活用」など、回答欄に書ききれないほどの記述があった家庭もあった。

逆に「いいえ」と回答した家庭では、「日々の生活に追われて余裕がない」、「ライフスタイルと呼べるような暮らしではない」といった記述が多かった。ちなみに、ここでの回答に家族構成、就労状況などによる偏りは特にみられなかった。しかし、このような家庭の 7 割近くが、「今後つくばでの生活でどのようなことを実践していきたいですか？」という設問に対して、「豊かな自然や、サークルによる交流など地域の良さに触れたい」といった記述をしており、前向きな姿勢がみられた。

最後に、少数ではあるが、「つくばスタイル」という言葉に対して「無理なネーミング、田舎者が無理しすぎなマイナスイメージ」、「コンセプトのみで現実が伴わない不安がある」、『「つくばスタイル」という言葉が嫌い』という否定的な回答もみられた。

3）考察

ここでは、前項で述べた調査結果をもとに住民レベルでの「つくばスタイル」の捉え方を考察していく。「研究学園都市」という独自の環境が生み出した、世界レベルでの先端性や外国人の多さ、教育環境の質の高さなどが「国際色の豊かさ」、「子育てしやすい環境」といった項目を牽引したと考えられる。また、自然が多く残る「田園都市」という要素が「エコな暮らし」、「家庭菜園」などを想起させていると考えられる。実際、市民農園などは早くから行われていたという事実もある[安藤 2007:21]。また、これらの要素は研究学園地区内や一部の近接する農村部にとどまっており、周辺農村部は「つくばスタイル」からは切り離されて捉えられていると考えられる。

つぎに、「つくばスタイル」の実践に関しては、広々した公園や歩道などを活かして体を動かす、家庭菜園をするといった回答が多かった。自然の多い環境を活かして、心身ともにリフレッシュしたり、楽しみを見出すといった自分なりの「つくばスタイル」ができつつある住民もいるということがわかる。今後、住民たちの意識をより広い範囲に向かわせ、つくば市全域で魅力の見つけあいが行われることが望まれる。

2. システムとしての「つくばスタイル」

(1)つくばスタイル縁日 2009

1)概要[21]

「つくばスタイル縁日 2009」は、つくばに点在する資源や、そこで暮らす人たちの活動、取り組みなどを紹介し、交流する場として開催された。主催はつくば市内のまちづくりに関わる活動家や法人で組織されたつくばスタイル実行委員会、共催はつくばスタイル協議会、後援が茨城県、つくば市、UR 都市機構、筑波都市整備株式会社、首都圏新都市鉄道株式会社、関東鉄道株式会社、茨城新聞社、常陽リビング社、常陽新聞社常陽ウィークリーとなっている。

このイベントでは「顔見せ縁日」、「その場で縁日」という 2 種類の縁日が設けられ

た。「顔見せ縁日」は2009年10月10、11日に、各地で活動している人々が一堂に集まって開かれるイベントである。会場はTX研究学園駅南側にある広大な葛城地区公園となった。点在する資源や人々が集まることで、来場者は一度でさまざまな魅力に触れることができる。また、集まった人々がお互いの活動の良さを発見し合い、その後の関係づくりのきっかけになるという狙いもある。「その場で縁日」は、10月10日から11月8日までの期間内に地域の各地で開催されるイベントをさす。つまり、地域全体を会場にしてしまおうという試みである。こうすることで、その場所ならではの景観や雰囲気などといった魅力や、そこで活動する人々も紹介することができるのである。

2)「顔見せ縁日」

「顔見せ縁日」は葛城地区公園内のクローバー広場、並木広場、つくばスタイル館の3つのエリアと、近接して設置されたおまつり広場、三角広場と呼ばれる2つのステージでさまざまなイベントが行われた。研究学園駅の南口を出て、公園に入るまでの道には「ちくわ」と呼ばれる、竹で作られたトンネルが80メートル近くも続いた。この「ちくわ」は地元である葛城・遠東地区の方々、つくば市役所、UR都市機構、大学の教員や学生、実行委員会の会員などの有志約50人が集まって作られ、地元の子どもたちによって飾りつけされた。入り口に立てられた看板には『「つくばの輪」が広がるようにとの願いを込めて』と書かれ、来場者を会場へと誘った。

会場内のクローバー広場では飲食店や物販、活動紹介などのブースが並んだ。参加団体は25団体で、多くはつくば市内で営業している店舗や、活動している団体などであった。広場の両サイドにブースが並んだため、各々に食べたいものを買い、広場の真ん中で輪になって食事を楽しむ家族連れの姿が多く見られた。

並木広場の目玉となったのは「つくばスローマーケット」であった。つくば市を中心とした地域で手仕事や手作りをモットーにプロとして創作、生活活動をしているクリエーターを集めたマーケットである。出店者は52にものぼり、出品されたものはアクセサリーや雑貨、陶器、楽器など多岐にわたった。個性的で味のある作品を熱心に見てまわる人も見られた。稲刈り、竹切り体験などもあり、子どもたちが楽しんでいる様子もみられた。

古民家を再生したつくばスタイル館では、その雰囲気を活かして、和琴の演奏や利

き酒セミナーが行われた。また、屋外では昔ながらのおもちゃで遊べる「子ども縁日」や、竹馬作り体験も行われた。

おまつり広場と三角広場ではさまざまなパフォーマンスが行われた。主につくば市で活動する音楽、ダンス、パフォーマンスサークルなどの発表であったが、その数は2日間で30団体以上にのぼった。三角広場の前には、ベンチではなく青いバランスボールが多数置かれ、そこで遊んだり、座ったりしながら、各々ステージを楽しんでいたのが印象的であった。

また、筆者が来場者に行ったインタビューでは、「会場が広々していて良い」、「のんびりしている」、「地元の人々やお店が出店しているのがいい」、「ステージパフォーマンスもあまりきちっとしてないところがつくばらしい」、「手づくり感がある」といった声が聞かれた。

3)「その場で縁日」

「その場で縁日」は、つくば市、つくばみらい市、守谷市の35ヶ所で開催された。そのうち30以上がつくば市内であった。もともとつくばで営業している、カフェや飲食店、雑貨屋などがつくばスタイル縁日にあわせて特別メニューを出したり、イベントを行ったりするものが多かった。また、筑波山麓地域や吉瀬など、もともとその地域内でイベントを行い、魅力の発信をしているものも参加する形をとった。

また、「つくスタ巡り」という、市民目線でみたつくばの魅力スポットを巡るというツアーも行われた。ここでは、筆者がスタッフとして実際に参加したつくスタ巡りについて詳しく記述する。このツアーはつくばスタイル縁日実行委員が主催するもので、2009年10月12日、30日の2回、同一の行程で行われ、参加者数は2回あわせて29人だった。筆者が参加したのは30日だった。このツアーは、「つくば建築&すそみめぐり」と名付けられ、午前はつくばセンタービルやノバホールなどの研究学園地区の建築物を歩いて見て回った。午後は筑波山麓地域に移動し、平沢官衙遺跡や北条商店街、神郡などを巡った。1日で学園地区も山麓地区も巡ることができ、新旧のつくばを体感できるのが魅力であった。参加者の反応としては、「つくばに住んでいながら知らないところがあったなんて。」と感激する声が聞かれたり、平沢官衙遺跡を訪れた東京からの参加者からは、「こんなに広大でのどかな土地があるのか！素晴らしい！」といった声も聞かれた。ツアー後に実行委員が行ったアンケートによると、参加者の居

住地は2回あわせて、つくば市内が14名、東京が7名、その他、牛久市、土浦市、野田市、市川市であった。感想としては、「気に入ったところにはまた改めてゆっくり訪れたい」というものが多くみられ、つくばの魅力を知ってもらうよいきっかけになったと考えられる。また、繰り返し訪れたいという声からは、今後交流が生まれていく可能性が期待できる。

4)「つくばスタイル縁結び賞発表会」

「つくばスタイル縁日」の会期間が終わった約1ヶ月後の2009年12月6日に、縁日の中でも特に「つくばスタイル」らしい取り組みについて、発表、表彰するという場が設けられた。会場はUR都市機構茨城地域支社内会議室であった。「つくばスタイル縁結び賞発表会」と呼ばれたこの企画の目的について、実行委員の一人である安藤氏は、「つくばらしいライフスタイルを議論する場としての縁日での活動をお互いに発表し、良さを見つけあうことで、つくばスタイルを感じる」ことにあると語った[22]。発表会では、実行委員の推薦や来場者へのアンケートの結果から選出された14の団体の活動について、それぞれの代表者が発表した。その後、選考委員により選考が行われ、表彰されるというものである。ただ、選考といっても、各選考委員が気に入った活動を1つ選ぶというもので、各活動に序列をつけるようなものではない。あくまで、発表者全員が表彰の対象であった。ここでの選考委員となったのは筑波大学教授、茨城新聞社社長、Mook誌『つくばスタイル』編集長、常陽リビング社編集長など、地元の活動や情報に精通している人々であった。

5) 考察

「つくばスタイル縁日2009」は首都圏はじめ、他地域へのPRというよりは、つくばの住民同士の魅力を発見し合う機会としての性格が強い。またつくばスタイルフェスタ2005のような沿線開発地域向けのイベントではなく、つくば全体を対象としている。これまで意識の中で隔離のあった、既存のつくばの魅力と沿線開発地区の魅力というものをすべて含んだ意味で「つくばスタイル」が使われている。つまり、ここでの「つくばスタイル」は、つくば地域全体を巻き込んでのまちづくりのビジョンであると考えられる。

(2)内部発展型のしくみ

この「つくばスタイル縁日」は一見、つくばスタイルフェスタ2005と同様につくばの魅力を紹介するイベントとして捉えられるかもしれない。しかし、ここでは「つくばスタイル」の新たな展開がみられる。公式ウェブページ内でも『つくばスタイル縁日とは地域の資源を発見し、その魅力を伝えあう「しくみ」です』[23]とあるように、これは「つながり、伝え合うしくみ」づくりであるといえる。

まず、「顔見せ縁日」については、出店、パフォーマンスなどすべての企画をあわせると100以上の個人や団体が、葛城地区公園に集まったことになる。これだけ多くの地域の事業者、活動団体が集まるということには非常に意味があると考えられる。例えば、普段つくば市内で店舗を経営している事業者であれば、自分のお店のPRの場となり、良さを知ってもらえれば、新たな顧客を増やすチャンスになる。また、市内で活動する団体やサークルであれば、自らの活動を広く発表する場となるため、活動に賛同する仲間を増やす良い機会になる。また、来場者にとってもメリットは大きい。新たにつくばに住み始めた人々はもちろんのこと、以前からの住民にとっても、今まで知らなかった地元の店舗、活動を一度に知り、体感できるのである。このイベント自体が楽しいという一過性のものではなく、気に入った店舗、活動があれば、今後来店したり、活動に参加することもできる。つくばでの生活の楽しみ方の選択肢を多く知る機会になるのである。これは、「その場で縁日」についても同様の効果があると考えられる。実際、「つくスタ巡り」に参加した人々の中には、「特に興味を持ったところには、今度改めてゆっくり訪れたい。」と話してくれた方もいた。以上、ここまで述べてきたのが出店者と来場者をつなぐしくみである。

これと同時に、出店者同士のつながりも生まれる。「顔見せ縁日」で他の企画から良さを発見し、交流が生まれる可能性もあるのである。例えば、「顔見せ縁日」で見つけた他店の良いものを、ぜひ自分の店で使ってみたいと思い、交流が生まれる。他団体の活動に共感、賛同し、今後一緒に企画を行うという提案が生まれる。このような、つながる可能性はいくらでも存在する。また、「その場で縁日」として参加しても、同じ「つくばスタイル縁日」という場で紹介される他の企画のことを知り、交流をはかるきっかけになる。縁日開催後に行われた、つくばスタイル縁結び賞発表会は、このようなつながりを強くしていこうという1つの取り組みであると捉えられる。

このように生まれたつながりによって、今度は伝え合うというしくみが動き出すこ

とになる。例えば、「顔見せ縁日」で食べた地元店舗の味に感動した来場者は、それを友人に話し、改めて店舗に訪れる可能性がある。ここでまず、来場者による口コミの伝え合いが行われる。こうすることで、店舗側はさらに顧客を増やすきっかけになるし、住民にとっても、暮らしを楽しむ有益な情報を得られることになる。さらに、気に入った店舗に出掛けていった住民に対して、今度は店舗側が他の事業者を紹介することができる。例えば、店舗で出している料理があったとしよう。料理に使っている野菜を作っている農家、料理を盛り付けている食器を作っている工房など、関わりのある事業者を伝え合うことで、発信の可能性はどんどん広がっていく。これが出店者側のつながりを活かした伝え合いである。「つくばスタイル縁日」がそのつながりを増やすきっかけになるのである。以上が、「つながり、伝え合うしくみ」の一連の流れである。

では、この「つながり、伝え合うしくみ」をより有効的に働かせるために必要なことは何であろうか。このしくみは、単により多くの事業者を集め、大規模な PR を行い、より多くの来場者を呼ぶといった、量的にアプローチするきっかけではうまく働きださない。このしくみの中においては、来場者や他の事業者から質を認められ、良いと思われなければ、つながり、伝え合いが行われないからである。自分が良いと思ったものでなければ関わろうとは思わないし、友人に紹介しようという気持ちにならないのは当然のことである。ここで重要なのは、このつくばという土地で、良いとされるもの、認められるものとはどのようなものであるのかということである。前節まででも述べているように、つくばではまちが独自の発展を遂げ、その過程の中で独自の価値観が育ってきた。そして、それを地域間競争に耐え得る、つくばの独自性として発信している。それは「素材を活かしたもの」、「独自のスタンスを持ったもの」に対して価値を見出すというものである。そして、そういった価値をつくり出しながら「他者と交流する」という姿勢を持ち、つながりをつくり、伝え合うからこそ、このしくみはうまく働きだすのである。つまり、このしくみは「つくばスタイル」ともいわれる独自の価値観を持ち、それを地域の売りとするつくばならではの内部発展システムであるということができる。

(3)相互作用による活性化

「つくばスタイル縁日 2009」をきっかけに、市民自らの手によって、地域の内部発

展システムが動きだしたということ示したところで、つくば市が現在置かれている状況に立ち返ってみよう。TX の開業から 4 年が経ち、沿線地区では開発が着々と進んでいる。商業施設が建ち並び、新たな住宅地も建設が進んでいる。この新たなまちに必要なのは新たな住民である。沿線地区の宅地が売れなければ、県や UR 都市機構が苦しむだけでなく、まちとして発展することができない。建物だけが建ち、人がいないまち。このようなまちができてしまっては、つくばのまちの魅力も奪われてしまう。また、新新住民というアクターが増えることによって、内部発展システムはさらにより活発に動き出す可能性もある。つまり、内部発展のためにも、沿線に新たな住民を呼ぶことは重要なのである。もともとは沿線の PR のために生まれた「つくばスタイル」である。つくば市内外にこの魅力を発信しなければ本末転倒である。ここまで見てきたように、「つくばスタイル」はもはや単なるキャッチコピーではない。つくばに愛着を持つ人たちによって生み出され、つくばを良いまちにしたいと願う市民によって高められてきた、現実をともなうつくばの魅力を示す言葉である。決して言葉だけが独り歩きしているような内実のない言葉ではない。市民に手によって内実はつくられているのである。これを活かして有効な PR を行う。新たな住民がやってくる。その住民を巻き込んで、さらに深みのあるつくばの魅力を考えていく。このような外部発信と、内部発展の相互作用により、つくばをさらに発展させていくことが望まれる。

第4章　結論

本稿は「つくばスタイル」という多様な文脈で使われている言葉を、地域づくりという視点から分析し、その特徴を捉え、「つくばスタイル」が現在のつくばの地域づくりにおいて果たし得る役割を明らかにすることを主題としている。

まず、なぜ「つくばスタイル」が多様な文脈で使われ得る言葉なのかを明らかにするために、第2章では「つくばスタイル」のルーツに着目した。ここで明らかになったのは、まず背景にTX開業にともなう沿線開発があったこと。そして、言葉としての「つくばスタイル」は沿線開発に対してさまざまな思いを持ったアクターの協働により生まれ、当初から複数の役割を担っていたということである。

つぎに、第3章では、複数の役割を担った「つくばスタイル」が実際に表現されている事例を分析することで、その意味の拡がりを捉えている。また、事例の中で表現される「つくばスタイル」の共通する要素を抽出し、これがつくばの歩みの中から生まれた独自の魅力に基づいていることを指摘した。さらに、拡がった「つくばスタイル」の新たな展開として、巻き込んだ人同士をつなぐというシステムがつくられつつあることが示された。

以上の展開を踏まえて、現在の地域づくりにおける「つくばスタイル」の役割について考察していく。まず1点目に挙げられるのが、定住層を増やすという目的に見合ったPRを可能にするという役割である。TXの沿線開発を背景に始まったつくばでの地域づくりは、地域を売り込むターゲットが定住層であるということになる。観光客を呼ぶという目的の地域づくりであれば、インパクトのある名物やイベントによる地域づくりは可能である。しかし、定住を促進したいのであれば、一過性のものではなく、日常を豊かにする魅力の発信が必要になる。日常生活は何か1つの魅力があれば豊かになるといったものではない。生活をトータルに支える基盤がなければ定住しようとは思わない。このことが、ワークショップの中で地域資源の選定が行われなかった理由であると考えられる。そのため、「つくばスタイル」というつくばの地域資源すべてを担い、つくばでの暮らしを想起させることのできる言葉は重要な役割を果たしている。

つぎに、ものや人を巻き込み、つなげるという役割が挙げられる。第3章でもみて

きたように、「つくばスタイル」は定義を持たず、あらゆるものを受容する言葉である。それゆえ、あらゆる地域の魅力を巻き込んで拡がりをみせている。こだわりのパン屋さんも、子育てサークルもみな同じ「つくばスタイル」として表すことができてしまうのである。このことは、これまで個々に点在し発信力の弱かったもの同士をつなぎ、ともに発信することを可能にする。また「つくばスタイル縁日」で見られるように、単に発信するだけでなく、事業者間のつながり、住民とのつながりをつくることで、内部発展システムになり得るのである。さらに、住民の意識をつなぐ可能性もあることを指摘しておきたい。つくば市にはその発展過程から旧住民、新住民、新新住民の混住がみられる。旧住民が沿線開発を他人事と捉えていること、新新住民が周辺の農村部に対する意識が低いことは本論でも触れた。また、「つくばスタイル」が沿線開発の PR に使われている言葉であるため、特に旧住民の中には自分たちが「つくばスタイル」に含まれることに違和感を覚える住民が少なくないという事実もある。しかし、この「つくばスタイル」のつなぐ力を利用することで、発信力を高めることができるというメリットもある。「つくばスタイル」という言葉によってというよりは、「つくばスタイル」が生み出すシステムによって、住民間の協働が生まれ、住民同士がつながっていくという可能性は十分にあると考えられる。

最後に、地域の価値を守るという役割が挙げられる。「つくばスタイル」の根底にあるものとして指摘したように、拡がりをみせる「つくばスタイル」を支えているのはこの地域に愛着を持つ人々の存在である。つくばを愛し、こだわりを持ちながらも他者との交流を楽しむ、こうした姿が「つくばスタイル」の価値を支えている。これは、「つくばスタイル」という言葉が生まれる以前から存在していたもので、市民たちにはこの価値を守りたいという強い思いがあると考えられる。つくばの魅力を無視した開発が行われ、地域に関わろうとしない新しい住民がやってくる。このようなことが起これば、これまで育んできた魅力が失われる恐れがある。それを避けるために「つくばスタイル」という言葉によって、つくばでの暮らしのあり方、住民の地域との関わり方を発信する。それに魅かれた人々がやってくる。「つくばスタイル」に魅かれて移住してきた住民は、同じように地域に愛着を持ち、関わりを持って暮らす。地域の魅力がさらに増していく。こういったプラスの循環を生み出すために、「つくばスタイル」として地域の価値を発信していく必要があるのである。

このような役割が期待される一方で「つくばスタイル」には問題点もある。それは

はっきりした定義がないゆえに、地域の目指すと統一のビジョンが見えてこないという問題点である。そのため、「つくばスタイル」を目指そうといわれても、一体何を目指すのかがわからない。地域づくりにおいてはアクター同士が共通のビジョンを持つことで、活動を円滑に有効的に進めることができる。それが示されないということは活動の目的が達成されない危険性もある。つくばスタイル縁日は、地域をつなぎ、伝え合うというビジョンのもとで開催された。しかし「つくばスタイル」という言葉がそのビジョンを示しているわけではない。ここに「つくばスタイル」の限界があると考える。そのため、このような取り組みをする上では、単に「つくばスタイル」と謳うだけでなく、取り組み全体のビジョンを示すような、明確な意思表示が必要であると考える。

以上で述べてきたように、可能性も課題も抱える「つくばスタイル」であるが、地域づくりという文脈において、非常に興味深い取り組みであることは間違いない。このような取り組みはまだ始まったばかりであり、TX 沿線のまちもまだまだ発展途上である。今後つくば市がどのような展開を迎えるのか、今後も目が離せないテーマである。

注

(1) 「地域」、「地方」の言葉の定義について、蓮見は「地方ということばは、政治的、経済的な区分用語であり、“親分／子分”というような二元論的なニュアンスが感じられる。それに対して地域ということばは分類的であり、社会学や生物学的な表現といえる。」[蓮見 2009:19]としている。本稿では対比による価値が付与されない「地域」を用いる。

(2) この『21 世紀の国土のグランドデザイン』は 1987 年に策定された『第四次全国総合開発計画』を 1993 年から 2 年におよぶ総点検を経て、時代の変革に対応した新しい国土計画として策定された。タイトルに「全国総合開発計画」をつけていないのは、従来とは異なる新たな理念を掲げ、過去のものとの決別を示すためである[樋口 1998:3,5]。

(3) 島袋氏が 2008 年 12 月 7 日に筑波大学で行った講義の内容を参考にしている。

(4) ここでも、島袋氏が 2008 年 12 月 7 日に筑波大学で行った講義の内容を参考にしている。

(5) これは筆者が 2009 年 10 月から 11 月にかけて、つくば市研究学園葛城地区で行ったアンケート調査であり、その詳細については第 3 章 5 節で述べられる。

(6) この期待感は 2004 年から数回つくばを訪れ、2006 年からは研究学園地区に住んでいる筆者自身も実感している。2008 年にそれまで自転車で 40 分ほどかけなければ行けなかった映画館が、15 分で行ける研究学園葛城地区にできたときには、筆者含め多くの筑波大生が歓喜した。

(7) ここでは結束氏への 2008 年 11 月 14 日のインタビューを参考にしている。

(8) 日本住宅公団、住宅・都市整備公団と変遷した都市基盤整備公団と地域振興整備公団の統合により、2004 年、独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構）が発足した。以下では便宜上 UR 都市機構と記す。

(9) この項では文献とあわせて、井口氏、島袋氏へのインタビューを参考にしている。

(10)この項では文献にあわせて、渡和由氏への 2009 年 9 月 14 日のインタビューを参考にしている。

(11) Group Tsukuba WIS（まちづくり市民専門家グループ）のホームページ（http://www.placemaking.jp/idea_ws/index.html）より（2009/12/31 参照）。

(12) それぞれの提案内容は以下の通り。

・住宅地・まちづくり系

環境共生型、民家再生型、共同利用型など新しいスタイルの住宅地の提案。

・賑わい系

駅前広場や公共用地など利用した、農産物市場の開催や農業体験と食が楽しめる市民農園の実施を提案。

・コミュニティサポート系

新しい住民でも安心して住める暮らしの情報提供のほか、体験型の街の魅力を紹介する生活支援組織の立ち上げを提案[常陽新聞 2004]。

(13)「つくばスタイル協議会」の活動内容は以下の通り。

1.つくばスタイルに係わる取組み全般の連携・調整を図る。

2.協議会として、つくばスタイルを継続的に情報発信していくために、以下の事業を実施する。

・つくばスタイルを体感し発信するワークショップ・イベント等の開催
・つくばスタイルを実践している団体や個人のサポート
・ホームページや情報ステーションを活用した情報発信
・その他、協議会の目的に合致し協議会で必要と判断する事業

出典：つくばスタイル協議会ホームページ
http://www.tsukuba-style.jp/(2010/1/2 参照)

(14) つくばスタイル協議会のホームページ

(http://www.tsukuba-style.jp/t_style/index.html) より (2010/1/5 参照)。

(15) つくばでは早くから市民農園の試みが農村部との接点で始まっている。市民との交流の志のある農家によって、休閑地を借受け市民に提供するかたちで運営している。作物づくりなどは農家の指導により行われ、区画は小規模であるが、市民と農家の人々との交流の場となっている[安藤 2007:21]

(16) 科学の街・つくばを楽しむための、研究機関等を巡るバスツアーのこと。乗り降り自由の循環バスに乗り、複数の機関を見学することができる。つくばサイエンスツアーオフィスのホームページ (http://www.i-step.org/tour/bustour/) より (2010/1/18 参照)。

(17) つくばスタイル協議会のホームページ

(http://www.tsukuba-style.jp/t_style/index.html) より (2010/1/5 参照)。

(18) UR 都市機構のホームページ (http://housing.ur-net.go.jp/tx/town/town06_c.asp) より (2010/1/5 参照)。

(19) 「つくばスタイルフェスタ 2005」の概要については、茨城県と UR 都市機構茨城地域支社が TX 沿線のまちづくり情報を発信する目的で発行している『TX 住みたいねっとマガジン vol.5』での掲載内容を参考にまとめた。

(20) 渡和由氏への 2009 年 9 月 14 日のインタビューで渡氏が語った言葉である。

(21) 「つくばスタイル縁日 2009」の概要、内容については、つくば市、UR 都市機構

が発行した『つくばスタイル縁日 2009 公式プログラム』での掲載内容および、筆者が実際に来場、参加して観察したことを参考にまとめた。

(22) 筆者も出席した 2009 年 12 月 6 日の「つくばスタイル縁結び賞発表会」にて、縁結び賞の説明として、安藤氏が話した内容を参考にしている。

(23) つくばスタイル縁日公式ホームページ（https://www.tsukuen.net/）より（2010/1/9 参照）

参考文献

安藤邦廣

2007　「山麓のつくばスタイル」『季刊まちづくり』16:16-21。

枻出版社

2004　『つくばスタイル』。

2005　『つくばスタイル No.2』。

2006　『つくばスタイル No.3』。

蓮見孝

2009　『地域再生プロデュース　参加型デザイニングの実践と効果』文眞堂。

樋口満

1998　『地域の価値を創る一発展への戦略』時事通信社。

平間久雄

1999　『地域活性化の戦略』日本地域社会研究所。

今村嶺雄

2005　『つくばレポート vol.1』つくば書店。

石崎竜一

2006　「イメージリーダー街区のまちづくり」『家とまちなみ』53:54-60。

常磐新線整備推進課

1998　「交流を支える交通網の整備　常磐新線プロジェクト」
http://www.pref.ibaraki.jp/forum/forum02/2-6.htm（2009/12/23 参照）。

常陽新聞社

1997　『徹底取材　つくばの現在 1996 年夏』常陽新聞社。

2004　「未来への新都市創造一つくばエクスプレズー　最大の沿線開発面積のつくば市」http://www.joyo-net.com/rensai/TX/TX040112.html（2009/12/31 参照）。

上笹恒

1979　「筑波研究学園都市における住民意識について」『筑波フォーラム』8:32-42。

小林史嗣・斎尾直子

2009　「都市農村混在・混住地域における住民交流とその活動拠点に関する研究」

『農村計画学会誌』27:341-346。

国土庁

1998 「21 世紀の国土のグランドデザイン」
http://www.kokudokeikaku.go.jp/document_archives/ayumi/26.pdf（2009/12/10 参照）。

日本経済新聞社

2005 『つくばエクスプレスがやってくる』日本経済新聞社。

恩田守雄

2002 『グローカル時代の地域づくり』学文社。

鈴木朗

1998 『新郊外都市「つくば」の生き生きライフ』日本経済新聞社。

鈴木慈太郎

1985 「筑波研究学園都市の建設と移転」学園都市問題研究会編『筑波研究学園都市』pp.66-114、大月書店。

首都圏新都市鉄道株式会社

2005 「つくばスタイルフェスタ 2005」『つくばエクスプレスだより』50:10
https://www.mir.co.jp/uploads/20051130155834.pdf（2010/1/1 参照）。

田中ひとみ

2007 『都市と農村の新たな「結」づくりをめざして』『季刊まちづくり』16:22-27。

筑波研究学園都市の生活を記録する会

1981 『長ぐつと星空』岳陽出版会。

つくば市

2005 「第 3 次つくば市総合計画」
http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/13/883/002318.html（2009/12/30 参照）。

2008 「統計つくば」
http://www.city.tsukuba.ibaraki.jp/dbps_data/_material_/localhost/GyouseiKeiei/ToukeiTsukuba_2008/ToukeiTsukuba_2008.pdf（2009/12/8 参照）。

つくばスタイル協議会

2008 『「つくばスタイル」及び「つくばスタイルコミュニケーション・マーク」使用規定の制定について』。

筑波町史編纂委員会

1989　『筑波町史上巻』筑波町史編纂委員会。

渡和由

2006　『まちづくり過程としての「つくばスタイルフェスタ 2005」』『家とまちなみ』53:48-53。

Summary

Extending "Tsukuba style" and the Tsukuba citizens

Large-scale residential quarter development is done in the place along railway-tracks region in the Tsukuba city starting with the Tsukuba Express opening in 2005. Word "Tsukuba style" was born by the cooperation of labor of the developer who wanted to call in a new resident to this residential quarter and the citizens who hoped for the city planning that made the best use of the charm in the region. "Tsukuba style" bore two or more meanings at first to be able to do this word. It was a concept of the charm of the city planning vision of the promo word of PR and place along railway-tracks and Tsukuba. Afterwards, the event that expressed "Tsukuba style" that the developer and the resident drew was held. Moreover, the magazine that introduced the living by Tsukuba was published. The one that it means "Tsukuba style" in these showed the extension. At first, it came to contain even the one "Agriculture", "Environment", and "Sports" afterwards though it was "City", "Nature", and "Wisdom" to be enumerated as a charm of Tsukuba. However, this extension is the one with my stance Tsukuba is loved being proven by the local populace who has the character of exchanging it with others.

The role that such "Tsukuba style" plays in the community building is the following three points. PR that markets the region to the first is done. The resident in the region fuses secondarily. The value of the region is thirdly defended. The system that uses "Tsukuba style" began still just to work, and the approach such as improving the resident's consideration in the future is expected.

謝辞

本論を書き進めるにあたって、多くの方々からのお力添えをいただきました。ご多忙の中お時間をいただいた、つくばアーバンガーデニングの井口さん、筑波大学の渡先生、都市再生機構の鈴木さん、つくばインキュベーションラボの島袋さん、平沢地区の結束さんに心からお礼を申し上げます。また、つくスタ巡りでの企画に参加する機会を与えてくださいました、上野さん、早坂さん、塚本さん、落合さんにあわせてお礼を申し上げます。

2008年秋に初めて平沢地区を訪れ、その美しい景色に感激したことを今でも鮮明に覚えています。平沢地区をはじめ、筑波山麓で地域づくりに取り組む方々に出会ったことが、今回のテーマを卒業論文で取り上げる大きなきっかけになりました。アプローチの仕方は違いますが、私なりのつくばへの思いを一つの形とすることができ、嬉しく思います。つくばに住む方々の地域を思う気持ちや主体性の高さは、つくばをさらに魅力的なまちにしていくと確信しています。今後のつくばに期待です。

そして、指導教員の関根先生、日頃の丁寧なご指導や、相談にいった際にかけていただいた言葉によって、なんとか書き上げることができました。本当にありがとうございました。院生の早川さんにいただいたアドバイスには、いつも励まされ、助けられました。あわせてお礼を申し上げます。また、議論を通してともに学んだ関根ゼミの皆さんにも心から感謝します。発表の際にコメントしてもらったことや、普段の雑談など、皆さんと過ごした時間が大きな支えとなりました。

大学4年間をつくばで過ごし、たくさんのすばらしい方々に出会ったことは、私にとって大きな財産です。最後に、アンケートの発送作業を手伝ってくれた志字さん、中山さんをはじめ、つくばでたくさんの時間をともにした友人たち、そしていつもサポートしてくれた家族に心から感謝します。

2010年1月

宇留野晴香